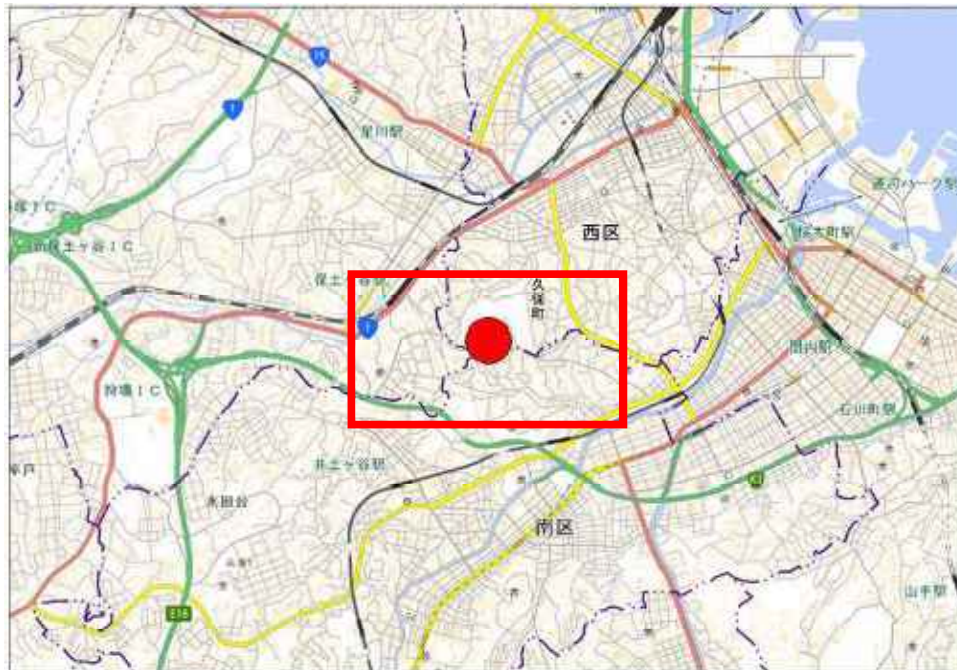


3.1 何が起こったか

(1)久保山墓地(横浜市西区元久保町)

キーワード:地域全体の慰霊、外国人被害



※ 地理院タイルに遺構の位置を追記して掲載

震災当時の横浜市は、現在の中区、西区の全域と南区、磯子区、神奈川区の一部を含む地域でしたが、この旧横浜市の被害は、全潰建物約 15,500 棟(神奈川県全体の約4分の1)、火災による焼失建物約 25,300 棟(神奈川県全体の約7割)、死者約 26,600 名(神奈川県全体の約8割)と、神奈川県内で最大の被害が出た地域となりました¹⁵。

西区元久保町にある久保山墓地は、JR 横須賀線「保土ヶ谷駅」南東約 800m にある横浜

¹⁵ 諸井孝文・武村雅之、「関東地震（1923年9月1日）による被害要因別死者数の推定」, 日本地震工学会論文集, 4 (4), 2004年

市営の墓地です。

横浜市営バス「久保山霊堂前停留所」を降りて西へ 200m ほど進み、横浜市久保山墓地管理事務所の脇を通っていくと、公園の先に関東大震災による身元不明者の陵墓が目に入ります(図 3.1-1)。その脇には慰霊碑(図 3.1-2)や説明板(図 3.1-3)があるほか、陵墓に通じる参道の左側には建立者が書かれていない朝鮮人の慰霊碑があります(図 3.1-4)。



図 3.1-1 久保山墓地の陵墓



図 3.1-2 横死者合葬之墓



図 3.1-3 説明板



図 3.1-4 朝鮮人慰霊之碑

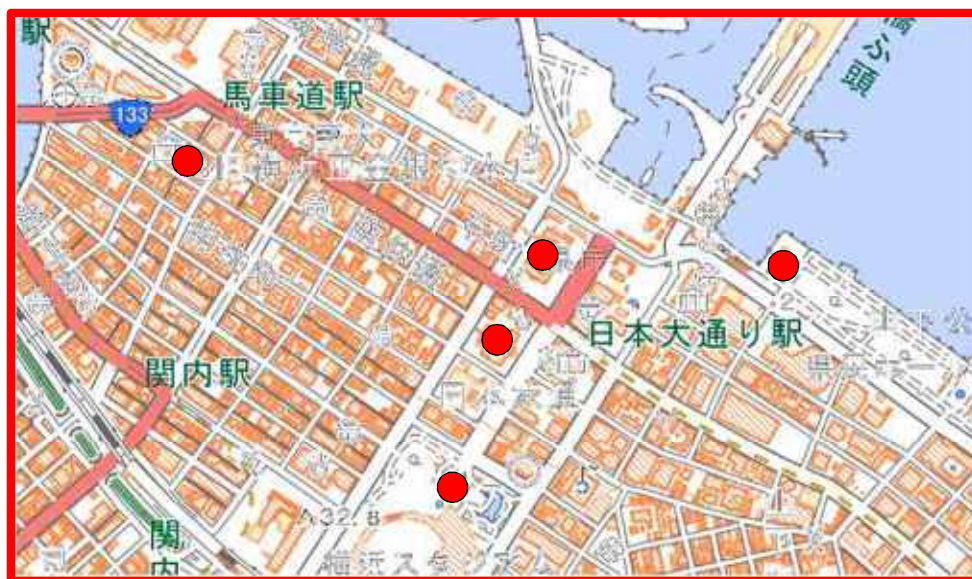
説明板には、皇室からの恩賜と義援金によって合祀霊場を建設したことが書かれています。また、「大震火災横死者中ノ無縁者に對《対》シ本市ハ曩《さき》ニ合葬ヲ行ヒ」とあり、この陵墓が、氏名が分からない犠牲者のために建てられたことが分かります。

霊碑の背面に、「氏名不詳ニシテ假《仮》葬ニ付シタル者實《実》ニ三千三百有餘《余》ヲ算ス」との記載があることから、ここには約 3,300 名の方が祀られていることが読み取れます。

陵墓の手前にある慰霊碑には、正面に「関東大震災殉難朝鮮人慰霊之碑」、背面に「昭和四十九年九月一日 少年の日に目撃した一市民建之」とだけ刻まれています。

(2) 県庁周辺の遺構(横浜市中区横浜公園、日本大通、山下町、南仲通)

キーワード:避難、火災、建物倒壊、外国人被害



※ 地理院タイルに遺構の位置を追記して掲載

震災当時の横浜市は、建物全潰率約30%、死者数約26,600名、そのうちの約9割が火災による死者という甚大な被害となりました¹⁶。

1876(明治9)年に整備された横浜公園は、記念碑(図3.2-1)によると日本最古の公園(太政官布達により1873(明治6)年から1887(明治20)年の間に指定された公園のうちの1つ)で、震災直後には、4~6万名を超える避難者が押し寄せたと書かれています。

横浜公園(図3.2-2)内に震災復興の記念碑があります。記念碑には、「大正十二年九月大

¹⁶ 諸井孝文・武村雅之、「関東地震(1923年9月1日)による被害要因別死者数の推定」,日本地震学会論文集, 4(4), 2004年

震災の際本市の大半猛火に蔽《おお》はるゝや多数の市民は緑陰池邊《木陰や池辺》に避難して危くも九死に一生を得たり」とあり、多くの市民は避難できましたが、50名程度の死者が発生しました¹⁷。



図3.2-1 横浜公園の復興記念碑

公園内の説明看板(図3.2-3)によると、震災直後は公園内に罹災者住宅や仮設庁舎が建てられていましたが、その後、復興事業の過程で、1928(昭和3)年から翌年にかけてグラウンドとスタンド(兼体育館)、音楽堂が整備されたとのことです。



図 3.2-2 横浜公園(奥は球場)

図 3.2-3 公園の説明看板のひとつ

厳しい状況で多くの方々が九死に一生を得たのは、樹木が多く火災の熱や火の粉を防いだこと、水道管の破裂により水溜りが生じ熱や火の粉を防いだこと、避難場所に家財が待ちこまれなかった(火の回りが速く避難者が家財を持ち出す時間的余裕がなかった)こと、周囲が燃え盛るのに時間差があった(被服廠の場合は同時的)ことが要因と考えられます¹⁸。

公園の近く、みなとみらい線「日本大通り駅」すぐのところには横浜地方裁判所があります。1890(明治23)年に北仲通五丁目に建てられた庁舎は、関東地震の激しい揺れによって倒壊したことから、1930(昭和5)年に現在と同位置に庁舎を移転しました。現在の庁舎

¹⁷ 武村雅之、「未曾有の大災害と地震学-関東大震災(シリーズ繰り返す自然災害を知る・防ぐ)」, 2009 年

¹⁸ 中央防災会議,「1923 関東大震災報告書」, 2006 年

は2001(平成13)年に竣工したもので、1930(昭和5)年に建てられた旧庁舎の外観を復元した造りとなっており、横浜市認定歴史建造物に認定されています。庁舎玄関の左側に、横浜市の復興が進む1935(昭和10)年9月1日に建てられた慰霊碑があります(図3.2-4)。



図3.2-4 横浜地方裁判所前の慰霊碑

慰霊碑には「所長を始め判事検《検》事辯《弁》護士等多數《数》の殉職者を出し偶《たまたま》召喚に應《応》して出廷せし證《証》人鑑定人其の他訴訟關《関》係人等の厄難を共にせし者も亦鮮《またすくな》からず」と記載があり、執務中の所長のほか、判事、検事、弁護士に加え、訴訟関係者も大勢出廷していた中で地震が起こったことがわかります。また、慰霊碑には「死者の多きこと全市中首位にあり」との記載があるように、94名もの死者が出る悲惨な現場となりました。なお、「大正震災志 上巻」¹⁹には建物の倒壊で108名の死者を出したとの記載があり、慰霊碑に記載の犠牲者の数はこれより少ないですが、慰霊碑には庁舎内にいて氏名が判明している人のみが記載されたのであろう²⁰と推察されています。

さらに、みなとみらい線「元町・中華街駅」から沿岸方向へ進むと、山下公園があります(図3.2-5)。山下公園は、関東大震災の復興事業として造成された公園で、横浜市内のがれき等で埋め立てて、1930(昭和5)年に開園したものです。公園内の西端にあるインド水塔は、インド風のモチーフを多分に取り入れた水飲み場の遺構で、横浜市認定歴史建造物に認定されています(図3.2-6)。

¹⁹ 内務省社会局,「大正震災志」,1926 年

²⁰ 武村雅之・都築充雄・虎谷健司,「神奈川県における関東大震災の慰霊碑・記念碑・遺構(その3 県東部編)」,2016 年



図3.2-5 山下公園

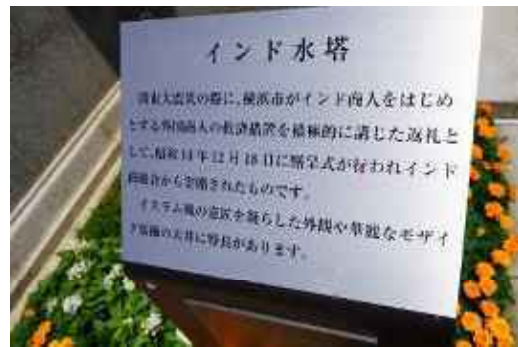


図3.2-6 山下公園のインド水塔

震災当時、山下町は壊滅的な被害を受け、横浜在住のインド人も多くの方が死傷し、住家を失いました²¹。このインド水塔の説明板には、震災時に横浜市が行った外国人商人への救済措置に対する横濱印度商組合からの返礼で、1939(昭和14)年に建てられたことが記されています。こうした支援に対する横浜市民への感謝と亡くなったインド人同胞への慰霊の意味を込めた碑が横浜市に贈られ、現在も残されています。



図3.2-7 神奈川県庁本庁舎



図3.2-8 神奈川県立歴史博物館

²¹ (一社) 横浜インドセンター ホームページ (2023.8.17 閲覧) <https://yokohama-india.org/>

最後に、周辺にある関東大震災にまつわる2つの県有施設を紹介します。1つ目の神奈川県庁本庁舎は、関東大震災で被災し焼失した第三代目庁舎に代わり、1928(昭和3)年に建てられた、神奈川県の震災復興のシンボリック建物で、国指定重要文化財に指定されています。鉄骨鉄筋コンクリート造り地上5階地下1階建てで、中央部には建物のシンボルである「キングの塔」が立ち上がっています(図3.2-7 神奈川県庁本庁舎)²²。

2つ目は、神奈川県立歴史博物館です。1904(明治37)年7月に横浜正金銀行本店として建設され、国の重要文化財・史跡にも指定されています。関東大震災では、地震の揺れには耐えて倒壊を免れましたが、その後の火災により地階を除く内装のほとんどと屋上ドームを焼失しました。その後、1967(昭和42)年3月の神奈川県立博物館の開館にあたり、高さ約19mの「エースのドーム」が復元され、1997(平成7)年からは神奈川県立歴史博物館にリニューアルして保存活用されています²³。

²² 神奈川県, 本庁舎の保存・活用の取組み (2023.8.24 閲覧)

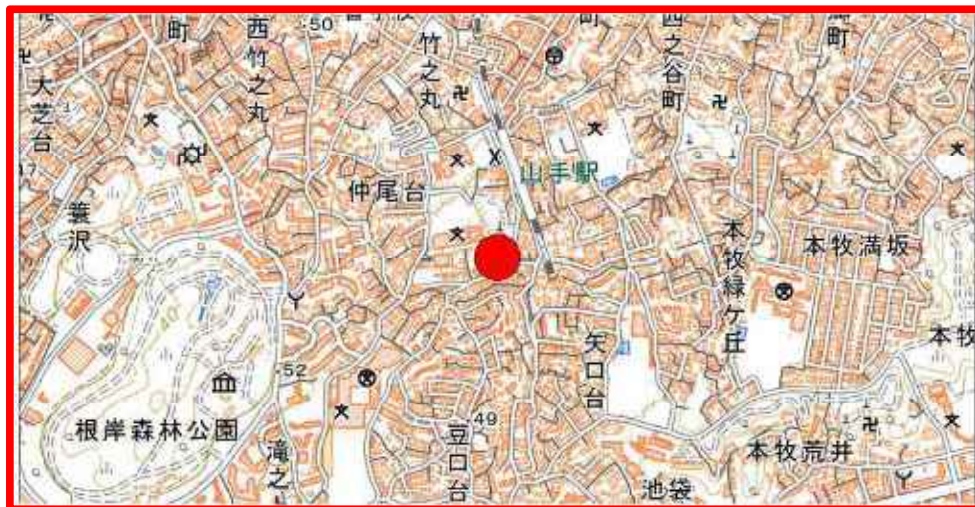
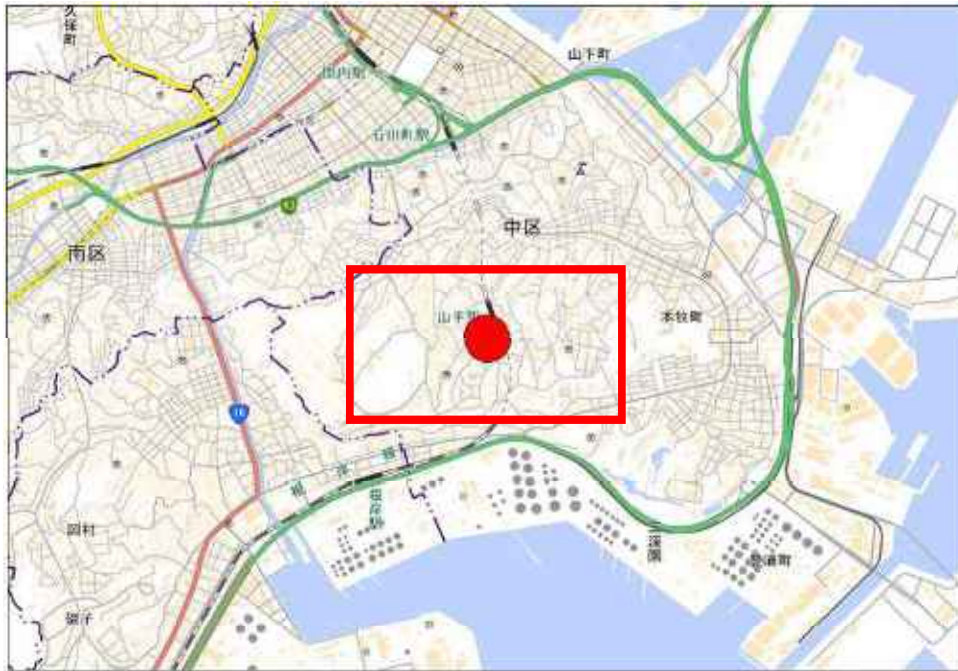
https://www.pref.kanagawa.jp/docs/rb2/saihen-seibi/hozon_katsuyou.html

²³ 神奈川県立歴史博物館, 建物のご紹介 (2023.8.24 閲覧)

<https://ch.kanagawa-museum.jp/cultural-properties/building>

(3)根岸外国人墓地(横浜市中区仲尾台)

キーワード:外国人被害



※ 地理院タイルに遺構の位置を追記して掲載

横浜には外国人墓地が、山手外人墓地(主に欧米人)、根岸外国人墓地(欧米人のほか中国人も埋葬)、中華義荘(中国人の墓所)、英連邦戦没者墓地(第二次世界大戦で亡くなった英連邦兵士のための墓所)と4つあります。そのうちのひとつ、根岸外国人墓地は、JR 根岸線「山手駅」を降り、南へ坂道に登ること約 100m のところにあります。

関東大震災では、外国人も多く被害を受け、死者 1,789 名、負傷者 2,353 名、所在不明者 5,251 名との記録が残っています²⁴。

²⁴ 横浜市政府所市史編纂係編 横浜市政府所市史編纂係、「横浜震災誌 第三冊」, 第十一章 横浜在留外国人の被害, 1926 年

根岸外国人墓地入り口脇の説明板には「現在 1,200 有余の外国人が埋葬され、墓碑は 160 基程が確認されている。」と書かれていますが、同時に「外国人船員、関東大震災罹災者及び第二次大戦後に埋葬された嬰兒(幼児)など、埋葬者名が不明な者も多い。」とも記され、震災の犠牲者が何名埋葬されているかは不明ですが、ここには横浜市が建立した外国人震災慰霊碑が建っています(図 3.3-1、3.3-2)。



図 3.3-1 根岸外国人墓地の外国人震災慰霊碑 図 3.3-2 慰霊碑に刻まれた文字

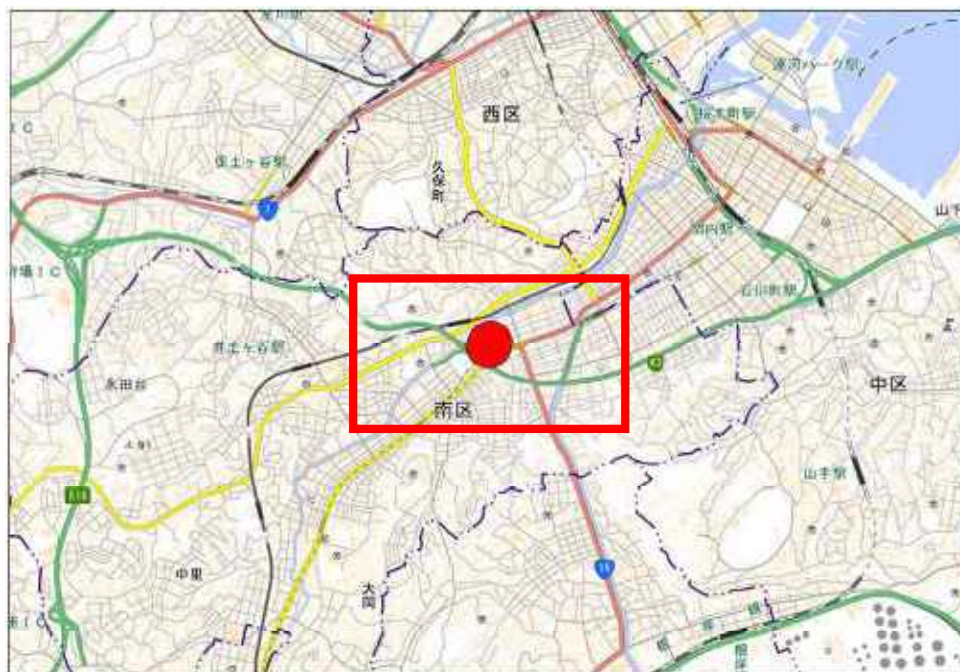
墓地の門を開けて入ると、敷地は斜面を利用してほぼ3段に分かれ、それぞれの段に関東大震災のほか、太平洋戦争などで亡くなった方の墓標が点在しています。3段目の斜面まで登ると右側にこの慰霊碑があります。

慰霊碑には、「ERECTED IN MEMORY OF THE FOREIGNERS KILLED IN THE GREAT EARTHQUAKE AND FIRE OF SEPTEMBER 1923 BY THE CITY OF YOKOHAMA SEPTEMBER FIRST 1926」と書かれ、関東大震災で亡くなった外国人を慰霊していることが明記されています。

慰霊碑の周りにある墓標の中には「KILLED IN EARTHQUAKE」や「LOST HIS LIFE IN THE EARTHQUAKE DISASTER」といった地震で亡くなったことが分かる記述が見られます。

(4)お三の宮(日枝神社)(横浜市南区山王町五丁目)

キーワード:避難、火災



※ 地理院タイルに遺構の位置を追記して掲載

横浜市営地下鉄ブルーライン「吉野町駅」の西側にあるお三の宮(日枝神社)(図3.4-1)は、周辺一帯が火災により焼失しましたが、本殿周辺は奇跡的に焼け残りました²⁵。

²⁵ 武村雅之・都築充雄・虎谷健司,「神奈川県における関東大震災の慰霊碑・記念碑・遺構(その3 県東部編)」,2016年



図3.4-1 お三の宮(日枝神社)の境内

当時の横浜市の市域は、建物全潰率30%、死者数約26,600名の甚大な被害²⁶となり、お三の宮は、隣接する日枝小学校とともに多くの罹災者の避難場所となりました。「横浜復興誌」²⁷第1巻(25)によると9月7日時点での避難者数は3,000名とされ、掃部山公園とならび横浜では最も多くの避難者が集まった場所となりました。神社本殿の左後方裏の敷地に献樹碑があります(図3.4-2)。



図3.4-2 献樹碑(本殿裏手)

碑文には、1923(大正12)年は神社創立250年で祠を改築し大祭を行おうとした矢先に大震災が発生したこと、大火の中で風向きが変わり祠殿が残ったこと、人々が集まって拝殿の下で寝起きし、工場や家屋を造営して危急を逃れ、皆安堵できたこと、半年後、神徳を明らかにしあらわそうとするために楠の稚樹百株を献上しかつ記念のために石に記録したことが書かれています²⁸。

現在の境内には、計4本の楠があります(図3.4-3)。ただし、現在(2023(令和5)年7月)

²⁶ 諸井孝文・武村雅之、「関東地震(1923年9月1日)による被害要因別死者数の推定」日本地震工学会論文集, 4(4), 2004年

²⁷ 横浜市,「横浜復興誌」第1巻(25), 1932年

²⁸ 武村雅之・都築充雄・虎谷健司,「神奈川県における関東大震災の慰霊碑・記念碑・遺構(その3 県東部編)」, 2016年

の宮司の話によると、樹齢はそれぞれ200年以上とのことで、震災後に植えられた楠との関連は不明となっています。



図 3.4-3 お三の宮(日枝神社)の境内の4本の楠

(5)曹洞宗東光寺(横浜市保土ヶ谷区上星川二丁目)

キーワード:建物倒壊、工場被害



※ 地理院タイルに遺構の位置を追記して掲載

関東大震災では県内の紡績工場を中心に多くの工場が倒壊し、犠牲者が出ました。工業地域での人的被害の多くは、建物の倒壊による被害が中心であり、火災による死者は、倒壊した工場に十分な救助作業を行う余裕がなかったために炎上した富士瓦斯紡績小山工場（静岡県駿東郡小山町）のみでした²⁹。特に横浜市保土ヶ谷区にあった富士瓦斯紡績株式会社保土ヶ谷工場では、454 名もの死者を出しました^{30,31}。

²⁹ 「災害教訓の継承に関する専門調査会報告書 平成21年3月 1923 関東大震災【第2編】」中央防災会議 災害教訓の継承に関する専門調査会, コラム5 (2023. 8. 17閲覧)

https://www.bousai.go.jp/kyoiku/kyokun/kyoukunnokeishou/rep/1923_kanto_daishinsai_2/

³⁰ 神奈川県, 「神奈川県震災誌: 神奈川県震災誌附録付 詔書, 御沙汰書」, 1927 年

³¹ 武村雅之, 「未曾有の大災害と地震学-関東大震災 (シリーズ繰り返す自然災害を知る・防ぐ)」, 2009 年

富士瓦斯紡績保土ヶ谷工場は現在の保土ヶ谷区川辺町にあり、相鉄本線「星川駅」の近くの帷子川から国道16号線の間約51,000坪(約17ヘクタール)に及ぶ敷地の広さでした³²。現在、敷地の西半分には保土ヶ谷区役所、消防署、警察署、郵便局などがあり、東半分にはマンションやショッピングセンターなどがあり、いかに広大な土地であったかが分かります。工場は第二次世界大戦時に軍需工場に転用され戦災で焼失したため、当時の面影は全く残っていません^{32,33}(現地の様子は4章(11)で紹介)。

相鉄本線「上星川駅」から北500mに、曹洞宗薬王山東光寺があります。寺院裏山の墓地中腹右側に慰霊碑があります。この慰霊碑が富士瓦斯紡績保土ヶ谷工場の倒壊で亡くなった方々の慰霊碑です(図3.5-1)。慰霊碑には、「關《関》東大震受難者之墓」(図3.5-2)と書かれ、側面には「昭和八年七月十五日建之」と建立年が書かれています。お寺の方の話では、今でも遺族の方がお参りや卒塔婆の依頼があるとのこと。



図3.5-1 東光寺の墓地にある保土ヶ谷工場の慰霊碑 図3.5-2 関東大震受難者之墓

「大正震災志 上巻」³⁴には、当時の保土ヶ谷工場はレンガ造で、食事を終えて仕事に就こうとしてレンガ壁の廊下を通過する際に地震が発生し、壁が倒壊して多くの死者が出たとの記録が残されています。

³² 武村雅之、「未曾有の大災害と地震学-関東大震災（シリーズ繰り返す自然災害を知る・防ぐ）」,2009年

³³ 神奈川県,「神奈川県震災誌：神奈川県震災誌附録付 詔書,御沙汰書」,1927年

³⁴ 内務省社会局,「大正震災志 上巻」,1926年

(6)真言宗平間寺(川崎市川崎区大師町)

キーワード:建物倒壊、地震に耐えた建物、復興



※ 地理院タイルに遺構の位置を追記して掲載

真言宗平間寺は川崎市川崎区にある寺院で「川崎大師」の通称でよく知られています。平間寺のある旧川崎町では、人口も多いため、死者数290名の甚大な被害となりました。

大師仲見世通りの商店街を抜けた山門の先、大本堂の左前にある経蔵裏の植え込みに「戦災復興之碑」などとともに木村新左衛門の記念碑があります(図3.6-1)。



図3.6-1 旧山門の建設者である木村新左衛門の記念碑

木村新左衛門は、空襲で焼失した旧山門を建てた大工で、碑文には旧山門が関東大震災でびくともしなかったと記されています。旧山門には荘厳な彫刻が施されていたほか、平間寺で倒壊を免れたのは、旧本堂、不動堂とこの旧山門だけであったように地震に耐える構造でもありました。しかし、この旧山門は1945(昭和20)年4月15日夜半から翌未明にかけての川崎大空襲で焼失してしまいました³⁵。

経蔵に隣接する植え込みの南側には、震災に耐えた旧本堂の礎石(図3.6-2)が残されています。説明板によれば、旧本堂は、1834(天保5)年の弘法大師一千年遠忌の記念に建立され、総けやき造りの壮大なもので礎石は72個にも及び、震災には耐えましたが、1945(昭和20)年の空襲で焼失してしまいました。



図3.6-2 震災に耐えた平間寺旧本堂の礎石

不動門から入り右側、八角堂の南側の植え込みの中には、関東大震災の供養塚(納札連供養塚)が建立されています(図3.6-3)。平間寺では主に江戸の通人や職人衆、芸者衆など粋筋が、それぞれ意匠を凝らして多色刷りにあつらえ、ひいき筋に渡したり、交換したりした千社札の愛好家の通人たちによる納礼会が定期的に行われていたようです。納礼会に参加していた人のうち、8名が震災で亡くなり、他の参加者がその供養に建てたものだと思われるとのことで、江戸時代から庶民に親しまれ、多くの人々が参拝した川崎大師ならではの慰霊碑です³⁵。

不動門から入りすぐ左側には、鐘樓の立つ石垣が位置しています(図3.6-4)。説明板によると、この石垣の銘板には、1789(寛政元)年正月に創建された鐘樓堂が、震災で倒壊しその後移築再建されたこと、その後空襲により焼失したことが書かれています。

³⁵ 川崎区誌研究会石造物調査部会、「川崎大師境内の石碑」(2023.8.17 閲覧)
http://fujitamichio.v2001.coreserver.jp/kawasaki/5k3_html/5k3_daishi-sekihi.html#top1



図 3.6-3 納札連供養塚



図 3.6-4 鐘楼石垣の銘板

鐘楼のある一角からさらに奥、大師公園方面にあるつるの池の南側の植え込みに位置しているのは大本坊落成記念碑です(図 3.6-5)。関東地震の激しい揺れで旧大本坊が倒壊したため、震災後に、仮の本坊が建てられました。しかし、仮本坊は狭小であったため、境内の南方にあるつるの池を埋め立てて新たに大本坊が建立され、その落成を記念して建てられた碑が上記の碑です。大本坊は、震災の教訓から鉄筋コンクリート造で建立されています。1945(昭和 20)年4月 15 日の空襲では、境内のほとんどの建物が焼失しましたが、大本坊は鉄筋コンクリート造であったため、外郭はそのまま残りました³⁶。



図3.6-5 大本坊落成記念碑

大本坊の左前に位置しているのは、青木正太郎翁壽碑です(図3.6-6)。「京浜電気鉄道沿革史」³⁷によると、碑文には、当時経営不振だった京浜電気鉄道会社(現・京浜急行電鉄株式会社)を立て直した青木正太郎が、一度退任したものの、震災で大きな被害を受けた直後の1923(大正12)年10月18日に、再び社長に就任し、喜寿を迎えた1930(昭和5)年まで復興に務めたこと、碑文の下線部には震災の際に自宅が被災しているにもかかわらず京浜電気鉄道の復旧の陣頭指揮を執ったことが書かれています。

大本堂後方の一般墓地の奥は、川崎大師の歴史を支えた歴代先師の墓域となっています(図3.6-7、3.6-8)。隆運大僧正は大山門の竣工に功績を残し、隆中大僧正は、42世継承時76歳と高齢で、震災の復興に尽力しましたが、本格復興は隆超大僧正に託されました³⁸。隆超大僧正は、鐘楼石垣銘板や大本坊落成記念碑に名前が見え、鐘楼、大本坊を震災後再興したほかに、木村新左衛門記念碑が建立されたのも隆超大僧正の代です³⁸。

³⁶ 川崎区誌研究会石造物調査部会,「川崎大師境内の石碑」(2023.8.17 閲覧)
http://fujitamichio.v2001.coreserver.jp/kawasaki/5k3_html/5k3_daishi-sekihi.html#top1

³⁷ 東京急行電鉄株式会社,「京浜電気鉄道沿革史」,1949 年

³⁸ 武村雅之・都築充雄・虎谷健司,「神奈川県における関東大震災の慰霊碑・記念碑・遺構(その3 県東部編)」,2016 年



図 3.6-6 青木正太郎
翁寿碑



図 3.6-7 震災前後の3名の貫首の五輪塔
(左から隆超、隆運、隆中大僧正)



図 3.6-8 平間寺の歴代
先師墓域にある金蔵院の
隆壽和上の墓碑

(7)日蓮宗宗隆寺(川崎市高津区溝口二丁目)

キーワード:建物倒壊



※ 地理院タイルに遺構の位置を追記して掲載

東急田園都市線「溝の口駅」北約100mにある日蓮宗宗隆寺には、山門を潜ると正面に本堂があり(図3.7-1)、右側に震災の記録を残す宝塔が建っています(図3.7-2)。



図 3.7-1 宗隆寺の本堂



図 3.7-2 宗隆寺境内の宝塔

お寺の歴史帳³⁹⁾には、「溝口地方の神社は全壊、家屋も全半壊するものが多く、当時の宗隆寺本堂は傾き、祖師堂の柱は折れ、壁は見るも無残に剥落、大宝塔は滅茶滅茶、庫裡は、押しつぶされなかったが大破した。」と、当時の大きな被害が記されています。

宝塔の塔身や台座の記載から、この塔が日蓮上人の550遠忌(1831(天保2)年)にむけて1818(文政元)年に建立された塔であり、その際の世話人は総勢44名であるとされています⁴⁰⁾。また、1855(安政2)年の安政江戸地震と思われる地震で転倒し3年後の1858(安政5)年10月に再建され、その後、関東地震によって倒壊し、1925(大正14)年に檀家の鈴木清一氏が復旧したことが書かれています。

こうした記録が残っていることで、この宝塔に、大地震のたびに倒れ、修復を繰り返してきた歴史があることがわかります。

³⁹⁾ 島田堯存,「改宗五百年を迎えた溝口宗隆寺」,宗隆寺,1961年,

⁴⁰⁾ 武村雅之・都築充雄・虎谷健司,「神奈川県における関東大震災の慰霊碑・記念碑・遺構(その3 県東部編)」,2016年

(8)鳥屋・地震峠(相模原市緑区鳥屋)

キーワード:土砂災害



※ 地理院タイルに遺構の位置を追記して掲載

地震峠は、JR横浜線「橋本駅」から西南西に約10km、国道413号線から宮ヶ瀬湖に向かって県道沿いにあります。県道沿いを流れる串川に架かる馬石橋の南側近くの馬石自治会館裏には地震峠の見学者用の「地震峠臨時駐車場」(図3.8-1)があります。駐車場から宮ヶ瀬湖方面に100mほど歩いたところに旧津久井町が設置した「鳥屋・地震峠」の説明板を2022(令和4)年9月に復元した看板が立てられています(図3.8-2)。説明板の後半部には「ここ馬石では、死者十六名、埋没棟数九戸で、遺体が確認されたのは八人のみ、ある家では六人家族全員が埋没死したのである。当時の串川は現在の県道よりもずっと南側を流れていたが、土砂災害のために串川がせき止められ、上流五百メートル位まで湖のようになってしまったという。」とあります。



図 3.8-1 地震峠の駐車場
(峠北側、馬石自治会館)



図 3.8-2 地震峠の説明板(自然災害伝承碑
「地震峠」を守る会、2022年9月1日)

また、説明板の向かい側には、地元の自然災害伝承碑「地震峠を守る会」が設置した「地震峠」と記した標柱もあり(図3.8-3)、「この地で亡くなられた方」として16名の名前が刻まれています。説明板と標柱の間の階段を上ると、さらに2種の石碑と地蔵尊が建っています(図3.8-4～3.8-7)。



図 3.8-3 地震峠の標柱「国土地理院認定
自然災害伝承碑 大震殃死諸精霊」
(自然災害伝承碑「地震峠」を守る会、
2022年9月1日)



図 3.8-4 2種の石碑と地蔵尊



図 3.8-5 大震殃死諸精霊碑



図 3.8-6 地蔵尊



図 3.8-7 中村喜作家慰霊碑

城山町(1993)⁴¹によると、1923(大正12)年10月14日には津久井郡内の死者を弔う追悼会が地震峠のある馬石で行われており、これらから「地震峠における土砂崩れは近隣の村々にとっても大きな衝撃を与える事件であった」ことが分かります。

⁴¹ 城山町,「城山町史 3 資料編近現代」,1993 年

(9)港町公園(横須賀市汐入町二丁目)

キーワード:地域全体の慰霊、土砂災害



※ 地理院タイルに遺構の位置を追記して掲載

横須賀市の被害は、資料によって若干の違いはありますが、死者540名、不明125名、計665名(新編 日本被害地震総覧⁴²)や死者683名、不明24名、計707名(横須賀市震災誌⁴³)など、各資料からも甚大な被害が出たことが分かります。

京急本線「汐入駅」を北東に約100m行くと、崖下に港町公園があります。当時この場所では、現在のJR横須賀線「横須賀駅」にかけて崖が崩れ、停車場と町とを行き交う多くの人々が犠牲になりました⁴⁴。

⁴² 宇佐美龍夫,「新編日本被害地震総覧」東京大学出版会,1996年

⁴³ 横須賀市震災誌刊行会,「横須賀市震災誌」,1932年

⁴⁴ 蟹江康光,「91年前の大正関東地震で生じた横須賀港町と西浦賀の大規模がけ崩れ、三浦半島の文化」,2014年

「横須賀市震災誌」⁴⁵には「湊町見晴山の駐車場の通路に沿へる高さ十丈《約30m》、厚さ十數《数》間《約20-30m》、長さ四丁《約400m》に亘る大崩壊は、道路及道路を隔てゝ海軍軍需部構内の一部と通行人五十名を埋没し」と書かれています。

港町公園にはこの崖崩れと関連すると見られる石造物が多数あり(図3.9-1)、その中には「大震遭難追善地蔵尊の碑」(図3.9-2)や、追善地蔵尊を奉る祠(図3.9-3)、海軍軍需部の女工が奉納した手水鉢、遭難者名碑(図3.9-4)などが含まれます。



図 3.9-1 港町公園にある石造物群



図 3.9-2 大震遭難追善地蔵尊の碑



図 3.9-3 追善地蔵尊と祠



図 3.9-4 遭難者名碑

さらに壇上にはもう一つ大きな供養塔があります(図3.9-5)。「大震災遭難者供養塔」の碑文には、1929(昭和4)年9月1日の七回忌法要に合わせて市により建立されたもので、横須賀市全体の犠牲者の慰霊のためのものであることが書かれています。



図 3.9-5
大震災遭難者供養塔

⁴⁵ 横須賀市震災誌刊行会、「横須賀市震災誌」,1932 年

(10)馬入橋西詰(平塚市馬入本町)

キーワード:橋梁被害、複合災害



※ 地理院タイルに遺構の位置を追記して掲載

現在の平塚市は震災当時、中郡の旧平塚町と旧須馬村の他8村で構成され、旧平塚町の住宅の被害は全潰率で約 50%、死者数は 266 名、馬入が位置する旧須馬村では、長楽寺にある供養塔碑文によると 60 名余りの方が犠牲となりました⁴⁶(3.1 節(11))にて詳述)。

JR 東海道線「平塚駅」から神奈川中央交通バスで「馬入橋停留所」に向かい、そこから東へ 300m ほど進むと、相模川に架かる国道1号線の馬入橋西詰に、震災からの復旧に関する記念碑があります(図 3.10-1)。

⁴⁶ 諸井孝文・武村雅之、「関東地震（1923 年 9 月 1 日）による被害要因別死者数の推定」, 日本地震工学会論文集, 4 (4) , 2004 年

記念碑の正面に「陸軍架橋記念碑」として陸軍が苦勞して橋を架けたことが書かれており、その脇に説明板があります(図 3.10-2)。説明板には、震災により馬入橋が倒壊したため、地元の消防組員と在郷軍人、青年団によって渡し舟が運行されていましたが、数日間に及ぶ豪雨で舟が流失し、中断していたところ、陸軍の第十五師団(豊橋)と第十六師団(京都)が架橋工事を実施し、橋が完成したことをたたえて建てられた碑であることが書かれています。



図 3.10-1 馬入橋西詰にある陸軍架橋記念碑



図 3.10-2 記念碑脇の説明板

神奈川県が編集した「神奈川県震災誌」⁴⁷には、馬入橋に限らず陸軍各師団の工兵が、昼夜晴雨を問わず交通機関の応急修理に尽力していた記録が残されています。

⁴⁷ 神奈川県, 「神奈川県震災誌 : 神奈川県震災誌附録付 詔書, 御沙汰書」, 1927 年

(11)真言宗長楽寺(平塚市札幌町)

キーワード:地域全体の慰霊



※ 地理院タイルに遺構の位置を追記して掲載

真言宗長楽寺は、震災当時、中郡の旧須馬村(現在の平塚市の一部)に位置し、震災による旧須馬村の住宅の被害は、全潰率約30%⁴⁸、死者数は後述のとおり長楽寺供養塔碑文によると60名余りと甚大な被害を受けました。

長楽寺は、JR東海道線「平塚駅」の南口から神奈川中央交通バスに乗車し「須賀四ツ角停留所」で降りてすぐそばにあります。境内に入って正面には寺務所が、左手には駐車場があります。長楽寺の境内(図3.11-1、駐車場の奥・永代供養墓の横)には高さ約3mの供養塔が建てられています(図3.11-2)。

⁴⁸ 諸井孝文・武村雅之、「関東地震(1923年9月1日)による被害要因別死者数の推定」,日本地震学会論文集, 4(4), 2004年



図3.11-1 長楽寺境内(駐車場奥に石塔・石碑が集められている)

当時の周辺の震度は6強相当と推定⁴⁹されており、供養塔の右側面(図3.11-3)には、「當《当》村ハ家屋倒潰壓《圧》死者六十余名」として、碑文中の当村《旧須馬村》の圧死者が60名余りであったと書かれています。

一方で、供養塔の左側面(図3.11-4)には、「須馬村 歿死《おうし》者」として、75名の方の名前が残されています。歿死者は、原因が分からない場合も含めて、震災に関連して亡くなった方を示します。



図3.11-2 長楽寺境内 供養塔 図3.11-3 供養塔右側面 図3.11-4 供養塔左側面

なお、供養塔の右側面には、1府4県が未曾有の被害を受けて、東京や横浜、横須賀、小田原なども焼失し、一朝にして10万以上の人命(約9割が火災による死者、約1割が住宅等の全潰による死者:内閣府ほか)と数十億の財産(住家被害棟数 約37万棟)が失われたことに対して、「實《実》ニ悲痛ノ極ニ達セリ」と書かれており、被害の痛烈さを伝えています。

供養塔の建立は1925(大正14)年9月1日とあり、被害に遭われた方の三回忌を記念したものです。供養塔の建立に際しては、計54名の方が寄進(寄付)を行ったことが台座に記録されています。

⁴⁹ 諸井孝文・武村雅之、「関東地震(1923年9月1日)による木造住家被害データの整理と震度分布の推定」,日本地震工学会論文集, 2(3), 2002年

(12)真言宗青蓮寺(鎌倉市手広五丁目)

キーワード:建物倒壊、共助による復興



※ 地理院タイルに遺構の位置を追記して掲載

震災当時、青蓮寺のあった鎌倉郡の旧深澤村(現在の鎌倉市の一部)は、建物全潰率約45%、死者数15名の被害が発生しました⁵⁰。旧鎌倉町や旧腰越津村の被害が大きく、現在の鎌倉市全体では建物全潰率約66%、死者数591名と大きな被害が発生しています⁵⁰。

鎌倉市にある青蓮寺は、JR東海道線「藤沢駅」南口から江ノ電バスに乗車し「鎖大師停留所」を降りてすぐのところにあります。青蓮寺は、震災によって境内にあった本堂、大師堂(当時は現在の墓地の位置にあった)など14棟すべてが倒壊しました⁵¹。

⁵⁰ 諸井孝文・武村雅之,「関東地震(1923年9月1日)による被害要因別死者数の推定」,日本地震学会論文集,4(4),2004年

⁵¹ 武村雅之・都築充雄・虎谷健司,「神奈川県における関東大震災の慰霊碑・記念碑・遺構(その3 県東部編)」,2016年

現在の住職の話によると、当時の住職(草繫全宜(くさなぎぜんぎ)僧正)は、地震発生時にいた庫裡も倒壊したことで、足にけがをしてしまったとのこと。

その後本堂は1931(昭和6)年に現在の姿に再建されました(図3.12-1)が、本堂の正面左右に架けられている「鎖大師復興飾財寄付者芳名」(図3.12-2、図3.12-3)には、寄附者の芳名が記されており、その人数は総勢800名にものぼり、立派な本堂の姿に全宜僧正の力量を感じることができます⁵²。本堂前には鉄製の天水桶(図3.12-4)があり、日付は1934(昭和9)年10月11日で、全宜僧正の代に弘法大師1,100年御忌記念として奉納されたものです。こちらの奉納者には長谷、新宿、二階堂、大町、山ノ内、扇ヶ谷、極楽寺、材木座、雪ノ下、浄明寺など様々な地域の方々が含まれており、鎌倉中に広がっていることが分かります。

奉納者の多さから、震災からの再建にあたっては大勢の人の支援が大きな力となったことがうかがい知ることができます。



図 3.12-1 青蓮寺の本堂



図 3.12-2 青蓮寺本堂に架けられた「鎖大師復興飾財寄付者芳名」の額(右側)

⁵² 武村雅之・都築充雄・虎谷健司,「神奈川県における関東大震災の慰霊碑・記念碑・遺構(その3 県東部編)」,2016年



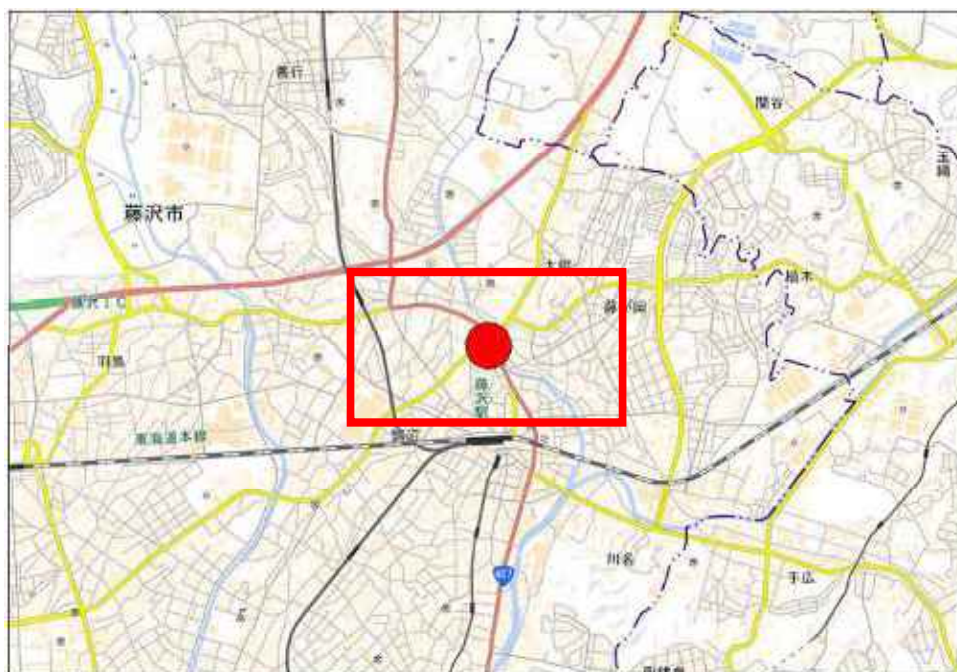
図 3.12-3 青蓮寺本堂に架けられた「鎖大師復興飾財寄付者芳名」の額(左側)



図 3.12-4 青蓮寺本堂前にある天水桶

(13)金砂山観音・鼻黒稻荷神社(藤沢市藤沢)

キーワード:地域全体の慰霊、建物倒壊、共助による復興



※ 地理院タイルに遺構の位置を追記して掲載

現在の藤沢市は震災当時、鎌倉郡の旧川口村、旧村岡村、高座郡の旧藤澤町、旧御所見村、旧六会村と旧小出村、旧渋谷村の一部を含む、1町6村にまたがる地域でした。旧藤澤町では建物全潰率が7割を超え、人口も多かったことから死者数も藤沢地区で 105 名となったことが分かっています⁵³。

JR 東海道線「藤沢駅」から北に約 750m にある藤沢橋に接する交差点の南西角に「鼻黒稻荷大明神」と「金砂山観世音」と書かれた門柱があります(図 3.13-1)。境内に入り階段を

⁵³ 諸井孝文・武村雅之,「関東地震(1923年9月1日)による被害要因別死者数の推定」,日本地震工学会論文集,4(4),2004年

上ると、正面に金砂山観音の本堂、左側に鼻黒稻荷大明神の社があります。社の前には2つの石碑が建っており、向かって右側が震災の記念碑です(図 3.13-2)。



図 3.13-1 金砂山観音・鼻黒稻荷神社
と書かれた門



図 3.13-2 「嗚呼《ああ》九月一日」
と書かれた震災記念碑

震災記念碑正面には、「嗚呼《ああ》九月一日」と書かれ、背面には震災により東京、横浜に大きな被害が出て十数万の人々が命を落としたこと、旧藤澤町は震動が最も強いところで、この敷地のすぐ北側にある遊行寺の諸堂もほとんど倒壊し、町内の家屋も大半が倒壊して百余名の人々が命を落としたことに加えて、震災から7年が経ち、町民あげて法要を行い当時の記憶を長く後世に残すために記念碑を建てることになった経緯が記されています⁵⁴(図 3.13-3)。



図 3.13-3 記念碑裏面には、建立の経緯などの下に「歿死《おうし》者」の名前が記載

また、記念碑の裏面には数多くの賛助員の名前も連ねられており、藤沢中の町々から様々な団体、個人が協力して記念碑を建立したことが分かります。

⁵⁴ 武村雅之・都築充雄・虎谷健司,「神奈川県における関東大震災の慰霊碑・記念碑・遺構(その1(県中部編))」,2014年

(14)曹洞宗岩泉寺(小田原市根府川)

キーワード:土砂災害、河道閉塞



※ 地理院タイルに遺構の位置を追記して掲載

小田原市南部の根府川集落は、震災当時は足柄下郡旧片浦村に位置していました。旧片浦村では、震災により全潰 103 戸、流失・埋没 93 戸、死者 406 名もの甚大な被害を受けました⁵⁵。

JR東海道線「根府川駅」から南西に徒歩5分にある曹洞宗岩泉寺の近くには、根府川集落を襲った土砂災害による集落全体の犠牲者を弔う供養塔があります(図3.14-1)。

本震の5分後に発生した余震(マグニチュード7.3)により、白糸川上流部の大洞で大規模(深層)崩壊が発生し、崩れた土砂が白糸川の河道を塞ぎ天然のダムが作られました。当日の早朝の豪雨によって川が増水していたため数分のうちに満水となり、その耐えられなくなった天然ダムが決壊し、土石流となって白糸川に沿って流下しました。河道を閉塞した場所は標高400m、根府川の集落まで約3.3kmに位置しており、この距離を5分程度で流下したと考えられ、時速40kmの速さと想定されます⁵⁶。

⁵⁵ 諸井孝文・武村雅之、「関東地震(1923年9月1日)による木造住家被害データの整理と震度分布の推定」,日本地震工学会論文集, 2(3), 2002年

⁵⁶ 土木情報サービス「いさぼうネット」、シリーズコラム歴史的な大規模土砂災害地点を歩く、コラム40



図 3.14-1 岩泉寺の歿死者供養塔

供養塔の右側には「大正十二年九月一日午前十一時五十八分俄然大震災アリ同時二山津波起リ老若男女二百餘《余》人歿死《おうし》セリ甚タ悲惨ノ至リニ堪ヘス」などと書かれており、犠牲者は289名にものぼり、婦人や子ども、老人が多かったようです⁵⁷。

また、根府川駅背後の崖が崩落し、駅舎、列車が流され、周辺には、流された列車とともに亡くなった家族を慰霊する五輪塔(図3.14-2)や、土石流で土砂に埋まって亡くなった家族の慰霊碑(図3.14-3)など遺構が多く残っています。



図 3.14-2 根府川駅北にある岡野家の五輪塔



図 3.14-3 根府川集落内にある宮本家8名の慰霊碑

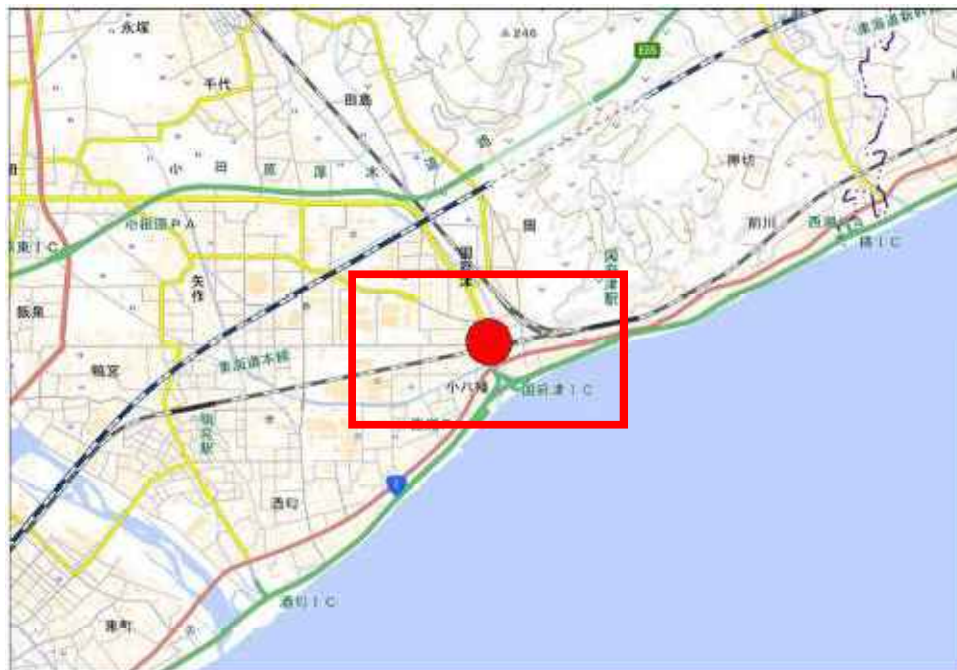
土砂災害による被害は、根府川集落一帯で約300名、鉄道関連や近隣の集落を含めると小田原市内で約400名⁵⁷の命を奪いました。地震による土砂災害の恐ろしさをうかがい知ることができます。

「関東大震災（1923）による小田原市の土砂災害－根府川・白糸川流域の大規模土砂災害地点を歩く－」（2023.8.17 閲覧）<https://isabou.net/knowhow/colum-rekishi/colum40.asp>

⁵⁷ 武村雅之・都築充雄・虎谷健司、「神奈川県における関東大震災の慰霊碑・記念碑・遺構（その2 県西部編（熱海・伊東も含む）」、2015 年

(15)耕地整理記念碑(富士見橋)(小田原市国府津)

キーワード:農地被害、耕地整理、共助による復興



※ 地理院タイルに遺構の位置を追記して掲載

JR東海道線「国府津駅」から西に約800mのところにある、森戸川沿いの「富士見橋際」交差点北東側に耕地整理記念碑があります(図3.15-1)。



図3.15-1 富士見橋際にある耕地整理記念碑

この記念碑は、国府津から上府中に至る300町歩(およそ300ヘクタール)もの広大な土地を18年かけて耕地整理(農地を区画整理して、用排水の利便性を向上させたり、農道を整備したりして目的の水田等に他の水田等を通らず到達できるようにすること。)を行った記念に建てられたものです。

武村ほか(2015)⁵⁸の震災に関連する部分の要約によると、「大正5年から昭和8年まで18年間を要して国府津から上府中に至る川東三百町歩の耕地整理を行った。その中で、関東大震災と昭和4年の豪雨で事業完了の遅延と事業費の増大に見舞われた」といいます。「此間に於ける組合員八百五十餘《余》名の協戮《きょうりく(協力と同義)》努力は特筆すべき者あり」との記載があるように、850名余りの耕地整理組合員が関わり、工事の完成に大変苦勞したことが碑文に記されています。

また、碑文には「區劃《区画》は整然として通路四達し行歩輓荷《ぎょうぶばんか(歩行や荷物をひくこと)》大に便に犁鋤《りじょ(農具のこと)》の利甚た加はり溝渠完備し湿地も二毛田に」とあり、この耕地整理によって、農道、水路が完備され、農具の発達も加わり収穫量が増し、地域の農業が発展して、後世に大きな利益をもたらしたことがわかります。

⁵⁸ 武村雅之・都築充雄・虎谷健司,「神奈川県における関東大震災の慰霊碑・記念碑・遺構(その2 県西部編(熱海・伊東も含む))」,2015年

(16) 今宿松尾大神(茅ヶ崎市今宿)

キーワード: 液状化被害



※ 地理院タイルに遺構の位置を追記して掲載

現在の茅ヶ崎市を構成する高座郡旧茅ヶ崎町、旧小出村はともに現在の震度7相当の揺れに達し、住宅の被害は全潰率で約60%前後、倒潰率(当時の定義では全半潰率のこと)は約80%と現在の茅ヶ崎市全体が甚大な被害を受けました⁵⁹。

死者数は現在の茅ヶ崎市や寒川町周辺一帯で合計100名にのびりますが、大規模な延焼火災の発生や、大規模工場の倒壊などの多くの犠牲者を出す被害が発生しなかったことから、人口に対する死者の割合は、横浜市や平塚市に比べると少ないものでした⁶⁰。

⁵⁹ 諸井孝文・武村雅之,「関東地震(1923年9月1日)による木造住家被害データの整理と震度分布の推定」,日本地震工学会論文集,2(3),2002年

⁶⁰ 諸井孝文・武村雅之,「関東地震(1923年9月1日)による被害要因別死者数の推定」,日本地震工学会論文集,4(4),2004年

特徴的な被害として、「大正震災志」上巻⁶¹の神奈川県高座郡の項には、相模川河口の茅ヶ崎町大字柳島における耕地の低下と河口部の隆起に伴う小出川の排水不能による耕地や住宅、道路の浸水、津波の被害があったこと、柳島浦漁業組合地区の地盤の隆起と隆起による商漁場の変化がみられたことが書かれています。

今宿松尾大神は、JR 東海道線「茅ヶ崎駅」より神奈川中央交通バス「今宿停留所」を降りてすぐにあります(図 3.16-1)。境内に入ってすぐ道路に面した右側に社殿の再築記念の石碑が建てられています(図 3.16-2)。

震災記念碑には、「相模川沿岸我が今宿里ノ如キハ震源ノ地ニ近キヲ以テ震度甚ダ激シク地表決裂シ至ル所ニ水ヲ噴キ家屋殆ド倒潰シテ」とあり(図 3.16-3)、震源に近く震度が大きかったため、被害が甚大であったことに加え、液状化現象が発生した様子をうかがわせる記載も残っています。

近隣には、液状化によって、鎌倉時代に架けられた橋の橋杭が水田に出現したと思われる遺構が国の史跡・天然記念物として残されており(4章(55))、周辺地域で広く液状化が発生した可能性が考えられます。



図 3.16-1 今宿松尾大神



図 3.16-2 今宿松尾大神の震災記念碑

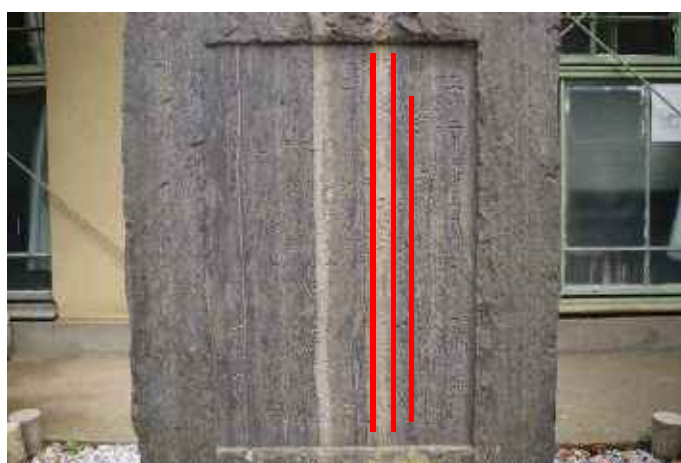


図 3.16-3 甚大な被害や液状化を思わせる記述(赤線部分)

⁶¹ 内務省社会局, 「大正震災志 上巻」, 1926 年

(17)高養寺浪子不動前の不如帰の碑(逗子市新宿五丁目)

キーワード:地盤変動



※ 地理院タイルに遺構の位置を追記して掲載

震災では、三浦郡旧逗子町(現在の逗子市)は、建物全潰率約40%、死者数76名となる甚大な被害となりました⁶²。

諏訪神社から大崎公園を新宿海岸方向へ降り、国道134号線を新宿海岸に沿って逗子方向に行くと左側に高養寺浪子不動の本堂があり、道路を挟んだ海岸の岩礁に石碑が建っています(図3.17-1)。石碑には「不如歸『帰』」と書かれています。

⁶² 諸井孝文・武村雅之,「関東地震(1923年9月1日)による被害要因別死者数の推定」日本地震工学会論文集, 4(4), 2004年



図3.17-1 高養寺浪子不動前にある「不如歸《帰》」の碑



図3.17-2 高養寺境内にある隆起海食台の説明板

この石碑は1933(昭和8)年、旧逗子町が町制施行20周年を迎えたことを記念して建てられたものです。石碑の建立は大掛かりなもので、石は以前から大崎鼻の沖にあった「鍋島さん」と言われていた巨岩を浪子不動下まで運んで建てられたものです⁶³。

高養寺境内の説明板(図3.17-2)には、不如歸の碑の立つ岩礁は関東大震災の時に隆起したもので、その後現在までゆっくりと沈降していると書かれています。つまり震災による海岸の隆起が石碑建立を進める上での一助になったと言えます。

当時の逗子町新宿の隆起量は0.8m程度⁶⁴と推定され、津波高さは調査の結果5m程度⁶⁵でした。

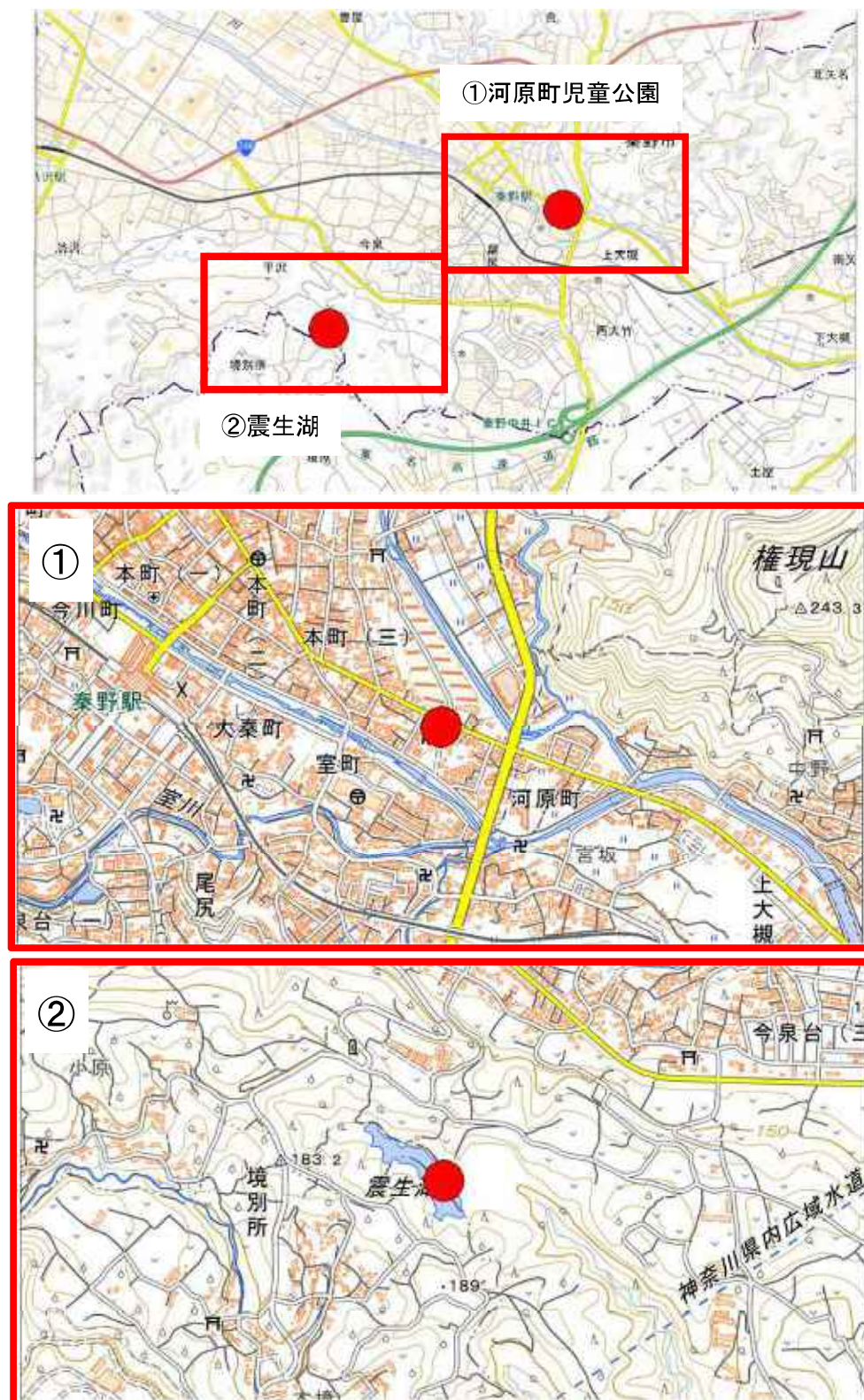
⁶³ 逗子市、「逗子市史 通史編(古代・中世・近世・近現代編)」,1997年

⁶⁴ 武村雅之・都築充雄・虎谷健司,「神奈川県における関東大震災の慰霊碑・記念碑・遺構(その1(県中部編))」,2014年

⁶⁵ 羽鳥徳太郎・相田勇・梶浦欣二郎,「南関東周辺における地震津波」,東京大学地震研究所編「関東大地震50周年論文集」,1973年

(18)震生湖と湖畔(秦野市平沢・今泉、中井町境別所)、河原町児童公園(秦野市河原町)

キーワード:地域全体の慰霊、土砂災害、河道閉塞



※ 地理院タイルに遺構の位置を追記して掲載

現在の秦野市の一部を構成する中郡旧南秦野村と足柄上郡旧中井村に位置する震生湖の湖畔と湖の入口には、地球物理学者である寺田寅彦が調査時に詠んだ震災の恐ろしさを伝える句碑と、土砂崩れに巻き込まれて犠牲となった2名の少女の供養塔(峰坂の大震災埋没者供養塔)が残されています。また、中郡旧秦野町に位置する河原町児童公園には震災で亡くなった秦野1町5村の方を慰霊する碑が建立されています。

旧秦野町と旧南秦野村の震災による住宅被害は、全潰率が旧秦野町で約30%、旧南秦野村で約25%、死者数は旧秦野町で21名、旧南秦野村で27名と甚大な被害が発生しました⁶⁶。

震生湖は、小田急小田原線「秦野駅」の南西、秦野市今泉と中井町との境界に接する周囲約1kmの小さな湖です(図3.18-1)。付近には「震生湖」(神奈川中央交通)というバス停があり、そのバス停よりやや北の「南町」(神奈川中央交通)から歩いていくこともできます。この湖は、関東地震により渋沢丘陵の南市木の山林や畑の一部が、幅約250mにわたって馬蹄形に崩壊し、その土砂が市木沢の谷を埋め、小川を堰き止めたことにより生まれました(図3.18-2)。



図3.18-1 震生湖



図3.18-2 震生湖 国登録記念物としての説明碑

⁶⁶ 諸井孝文・武村雅之,「関東地震(1923年9月1日)による木造住家被害データの整理と震度分布の推定」,日本地震工学会論文集,2(3),2002年

東京帝国大学(現在の東京大学)地震研究所の所員であった寺田寅彦は、震災から7年後の1930(昭和5)年に二度にわたり震生湖で調査を行いました。夏目漱石門下の俳人でもあった寺田は、その時のありさまを「山さけて」、「穂芒や」、「そば陸稲」の3つの句として詠みました。その後、1955(昭和30)年9月1日に、当時の秦野高校教諭、宮本信義氏と杉山茂夫氏が学習院大学教授、寺田と同門下の小宮豊隆氏を訪問し、寺田が調査の際に詠んだ句のうち地震の恐ろしさがよく表れている「山さけて 成しける池や 水すまし」を揮毫してもらい、秦野市の資金で今の位置に建立しました(図3.18-3)。また、「穂芒や」、「そば陸稲」2句については、近年、本町小学校と震生湖停留所脇(後述の峰坂の大震災埋没者供養塔近く)の2箇所に句碑が建立されました⁶⁷。



図3.18-3 震生湖畔にある寺田寅彦の句碑

峰坂の大震災埋没者供養塔は、前述の近年建立された寺田寅彦の「そば陸稲」の句碑の近く、震生湖停留所脇の林の中にたたずんでいます。(図3.18-4)。

供養塔正面には「大震災埋没者供養塔」と書かれ、「童女」の文字が2つ見え、土砂崩れに巻き込まれて亡くなった2名の少女のための供養塔であることを示しています。

少女達は南秦野尋常高等小学校(現・秦野市立南小学校)の児童で、地震当日、始業式後の帰り道に峰坂(現在の駐車場方面へ登る坂)を歩いている際に土砂崩れの被害にあったとみられています。学校の先生や消防団、地元住民などが懸命の捜索にあたりましたが、遺留品などは発見できませんでした。その後、旧南秦野村では有志を募り2名の少女の慰霊のために、供養塔を建立しました。

⁶⁷ 武村雅之・都築充雄・虎谷健司,「神奈川県における関東大震災の慰霊碑・記念碑・遺構(その1 県中部編)」,2014年



図3.18-4 犠牲になった少女2名を祀る供養塔

小田急小田原線「秦野駅」の東約700m、玉寶山命徳寺(天台宗)に隣接する河原町児童公園(図3.18-5)は、以前は鬼子母神を祀るお堂が建てられていて、地元の方からは「鬼子母神さん」と呼ばれていたそうです。その後、お堂は本堂に通じる参道に移築され、公園の一隅には大きな慰霊碑(命徳寺の震災歿死《おうし》者供養塔、図3.18-6)が建立されています。公園は、玉寶山命徳寺の北側に隣接しており、道路沿いの階段を登った草地の左奥隅に慰霊碑があります。

慰霊碑正面には「震災歿死《おうし》者供養塔」と書かれており、背面には、秦野1町5村、合計224名の震災で亡くなられた方々の氏名が町村ごとに書かれています。また、「供養塔建立世話人」として、町村ごとにこの慰霊碑の建立に関わった方の氏名が書かれています。この慰霊碑は1930(昭和5)年に建立されたもので、震生湖近くの市木沢で犠牲になったとされる少女2名の名も旧南秦野村の犠牲者の中に書かれています⁶⁸。



図3.18-5 河原町児童公園(左:隣接する道路から階段を上がる、右:上に広場が広がる(供養塔は、写真左奥にある))

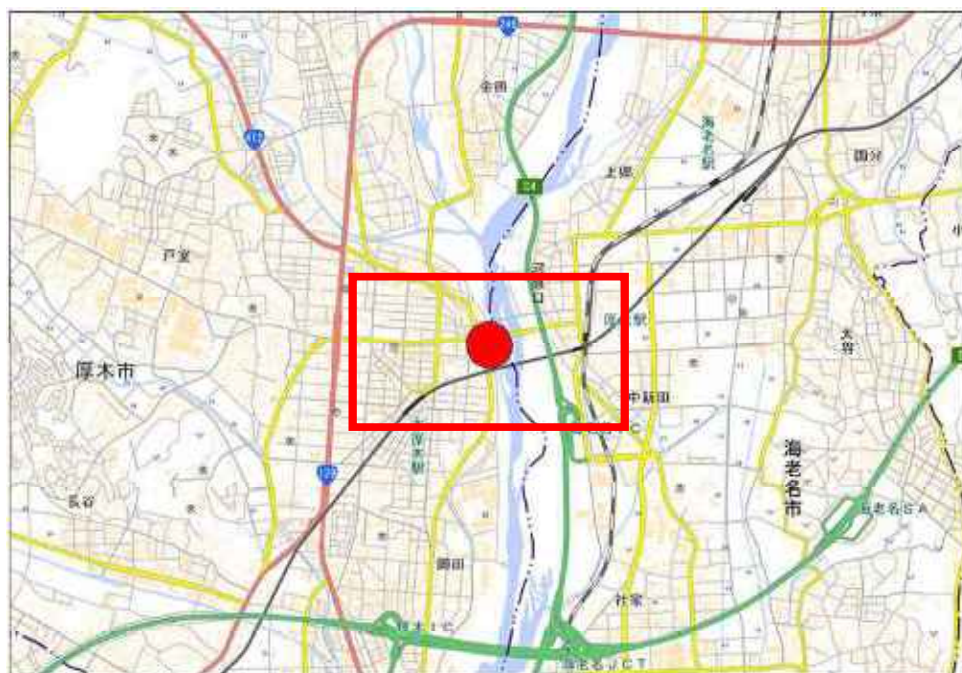
⁶⁸ 武村雅之・都築充雄・虎谷健司,「神奈川県における関東大震災の慰霊碑・記念碑・遺構(その1 県中部編)」,2014年



図3.18-6 河原町児童公園の供養塔

(19)厚木神社隣地(厚木市厚木町)

キーワード:地域全体の慰霊、建物倒壊、火災



※ 地理院タイルに遺構の位置を追記して掲載

現在の厚木市の一部を構成する中郡旧相川村では、建物全潰率が100%と言われるほか、愛甲郡旧厚木町でも半数近くが全潰するなど、一部の地域で甚大な被害が発生しました⁶⁹。また、当時の相模橋も、「高座郡海老名村寄りの南端三十五間(木造)墜落し、更に九月十五日の豪雨に依る増水で、厚木町寄りの北端四十間(木造)も墜落し、中央の一部(鉄製)残存して河中に兀立《こつりつ(ぼんやり立っていること)》する」⁷⁰といった状況でした。

⁶⁹ 諸井孝文・武村雅之,「関東地震(1923年9月1日)による木造住家被害データの整理と震度分布の推定」,日本地震工学会論文集,2(3),2002年

⁷⁰ 警有社,「神奈川県下の大震災火災と警察」西坂勝人,1926年

現在、厚木市と海老名市をつなぐ相模川に架かる相模大橋の西岸、厚木市にある厚木神社の隣に2つの石碑が建っています。左側は烏山藩厚木役所跡(市指定史跡)を示す石碑が、右側に震災記念碑があります(図3.19-1)。

正面には関東大震災の発生した日付とその日への想いを示す「あゝ九月一日」と書かれています。裏面には、「激震あり火各處《処》に起り餘《余》震間断なし千八戸のうち全潰五百四十九戸半潰二百八戸焼失二百五十一戸に上り歿死《おうし》二十八名負傷六十四名を數《数》ふ」とあり、激しい本震や各地で発生した火災、数多くの余震と、これによる膨大な数の全半壊建物や焼失建物、死傷者に関する記録が残されています。



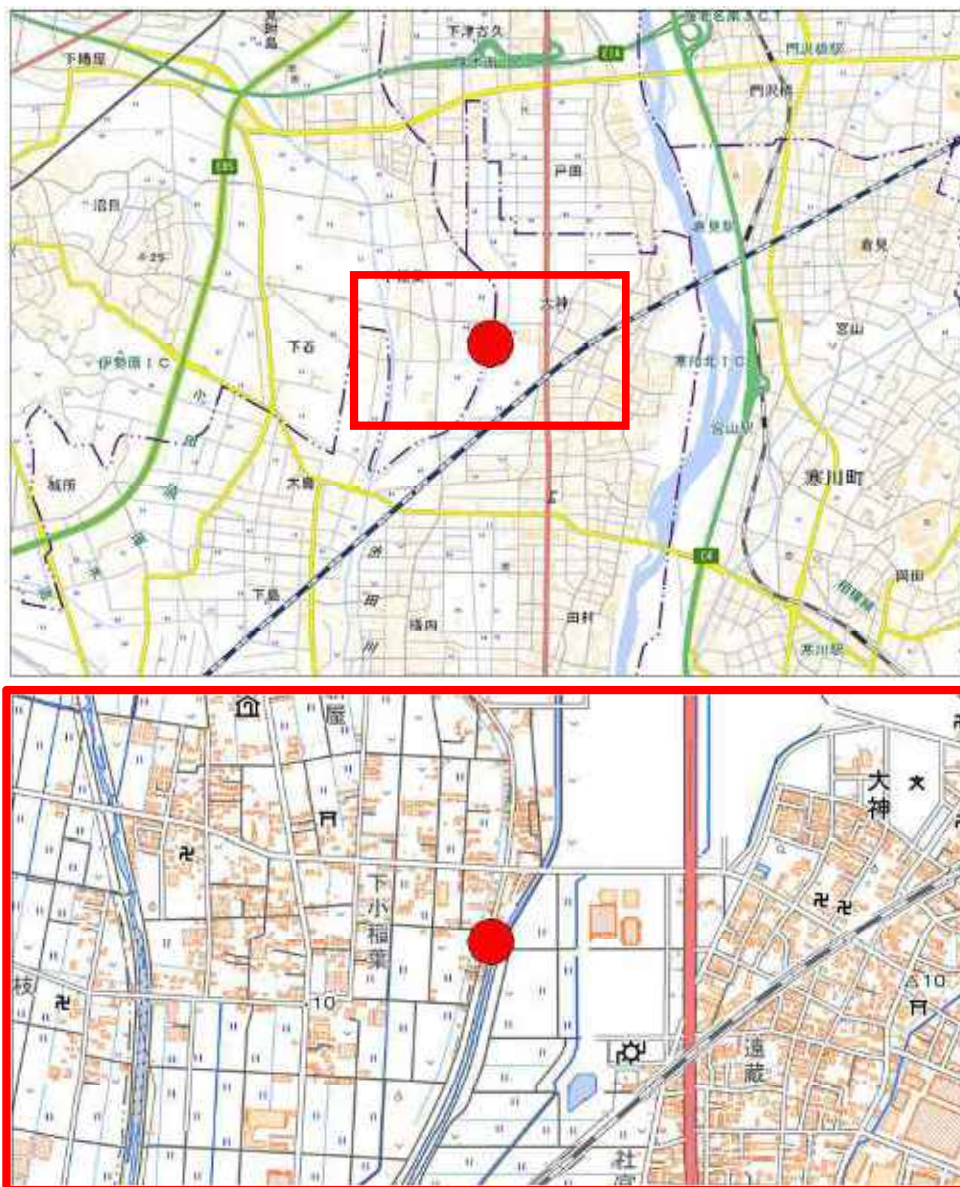
図3.19-1 厚木大橋の際にある厚木町の慰霊碑

別資料⁷¹では、旧厚木町の建物全潰率は70%にもものぼったとも言われます。火災による焼失のほか、軟弱地盤や埋立地等のため地盤災害の影響を受けやすいことから家屋の被害が大きいことが述べられています。

⁷¹ 神奈川県, 「都市化社会の総合防災対策に関する調査研究—安全都市創造をめざして—」, 1982 年

(20)玉川緑道終点(伊勢原市小稲葉)

キーワード:地盤変動、複合災害



※ 地理院タイルに遺構の位置を追記して掲載

伊勢原市は、震災当時、中郡の2町5村で構成されており、建物全潰率が旧岡崎村で9割近く、旧大田村でも6割を超え、そのほか旧伊勢原町や旧比々多村、旧成瀬村でも3割を超える被害が発生し、各町村で10名以上の死者が発生しています⁷²。

伊勢原市小稲葉(旧大田村)、小田急小田原線「伊勢原駅」から神奈川中央交通バスに乗車し「枝大島入口停留所」で降りた後、笹張川から100mほど北の玉川緑道終点に、旧玉川の由来を示した説明板(図3.20-1、3.20-2)があります。

⁷² 諸井孝文・武村雅之、「関東地震(1923年9月1日)による木造住家被害データの整理と震度分布の推定」,日本地震工学会論文集, 2(3), 2002年



図3.20-1 玉川緑道(旧河道)の終点(舗装路はベンチの数m先まで。先は現在の笹張川)

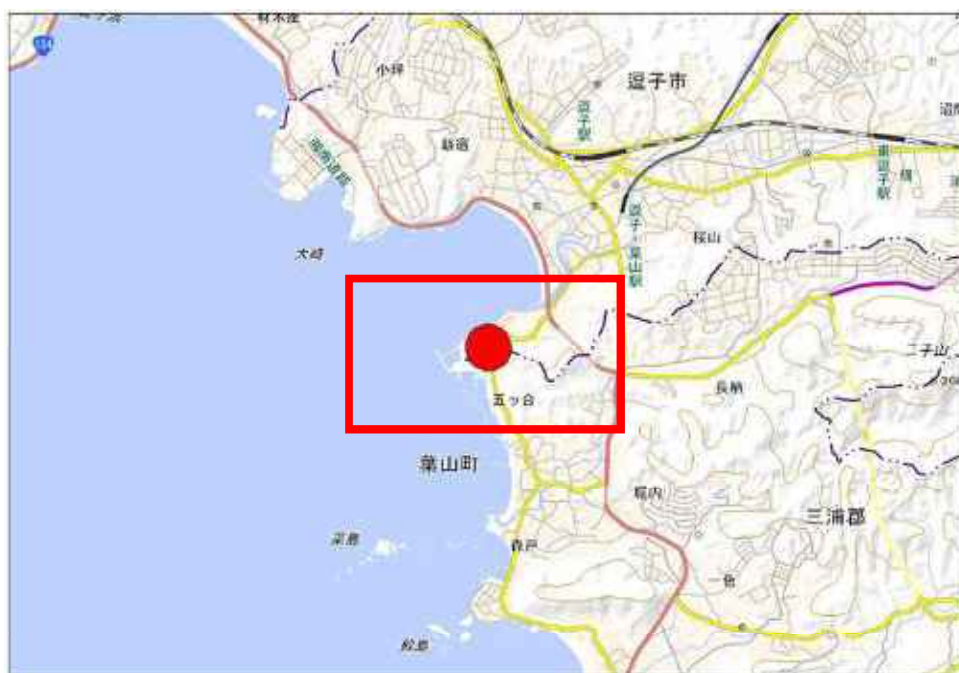


図3.20-2 玉川緑道(旧河道)の終点付近にある説明板

旧玉川の由来を示した説明板には、旧玉川が現在の厚木市から平塚市へと流れる農業用水路として大きな役割を果たしてきましたが、大正12(1923)年の関東大震災により平塚地域一帯が隆起して南側へ川が流れにくくなったため、豪雨時には氾濫して被害が続出したことが書かれています。このため、1944(昭和19)年に現在の新玉川が造られ、より東へ流れるようになり、新玉川ができてから水害はなくなったことが書かれています。

(21) 燈摺(あぶずり)葉山港路傍(船溜竣工記念碑)(葉山町堀内)

キーワード: 地盤変動、港湾被害



※ 地理院タイルに遺構の位置を追記して掲載

現在の葉山町を構成する震災当時の三浦郡旧葉山村は、建物全潰率約30%、死者数26名の被害となりました⁷³。

葉山港の路傍に建つ「船溜竣工記念碑」は、震災の際の隆起(0.8m程度⁷⁴)によって使えなくなった葉山港を復興整備した記念碑です(図3.21-1)。

⁷³ 諸井孝文・武村雅之,「関東地震(1923年9月1日)による被害要因別死者数の推定」,日本地震工学会論文集,4(4),2004年

⁷⁴ 武村雅之・都築充雄・虎谷健司,「神奈川県における関東大震災の慰霊碑・記念碑・遺構(その1(県中部編))」2014年



図3.21-1 鑑摺(あぶずり)葉山港の路傍に建つ船溜竣工記念碑

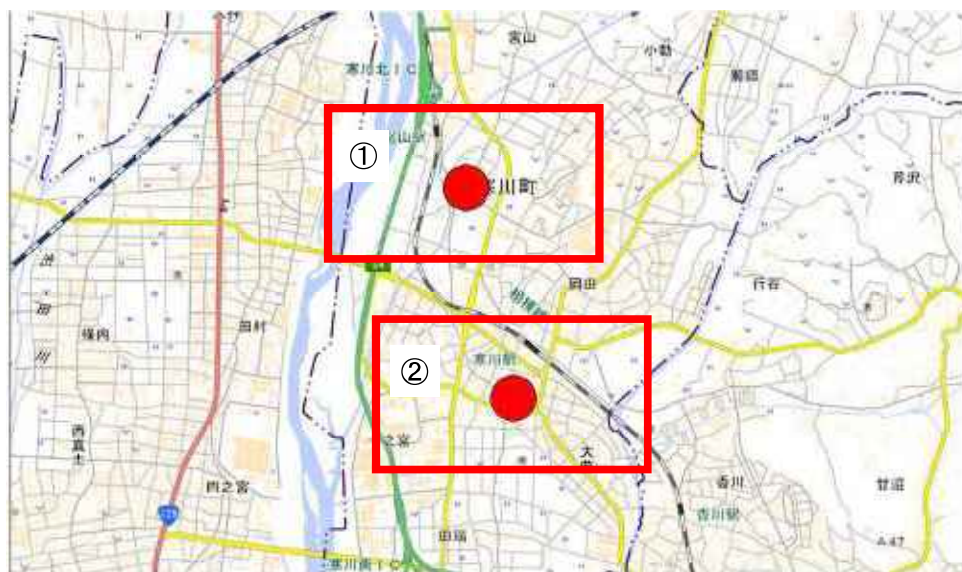
記念碑には、「大正十二年九月一日ノ大震災ニ因リ海岸ノ隆起甚シク船舶ノ碇繋避難ノ利便ヲ喪《うしな》ヒ」とあり、葉山港の船溜(ふなだまり)が隆起し使えなくなったことが書かれています。また、漁船の係留は砂浜に引き上げるしかなく、一旦天候が悪化すると大破する船が多かったことも書かれています。

さらに震災後、魚介類への需要は増大し、漁船の増加・大型化が進み、復興工事を願う漁民の「痛嘆」(ひどく嘆き悲しむこと。痛切な嘆き)が長かったこと、この窮状を打開し新たな発展拡大を目指し組合役員・組合員が一丸となって、鑑摺(あぶずり)船溜の再建を遂行したことが書かれています。地震によって地盤が隆起した様子や、総工事費十二万余円(現在の貨幣価値で約6億円)にものぼった工事が、有力篤志家(味の素本舗の鈴木商店)の資金援助のほか、多くの方々の協力で実現したことが確認できます⁷⁵。

⁷⁵ 葉山史郷土研究会,「郷土誌葉山」,2011 年

(22)寒川神社(寒川町宮山)と一之宮八幡大神(寒川町一之宮一丁目)

キーワード:要配慮者の被災



※ 地理院タイルに遺構の位置を追記して掲載

高座郡旧寒川村の住宅被害は、全潰率は約 60%前後、倒潰率は約 80%にのぼり、甚大な建物被害を受けました⁷⁶。

寒川神社は県内で鶴岡八幡宮とともに国幣中社に列せられていた神社で、JR 相模線「寒川駅」から約 1.2km 北西にある参道から三ノ鳥居をくぐった先に石造の鳥居の一部と立札があります(図 3.22-1)。

この鳥居の一部は 1796(寛政8)年、木内善治郎の寄進により参道に建立された一ノ鳥居の一部です。一ノ鳥居は、1855(安政2)年江戸大地震、1923(大正 12)年関東大震災と二度にわたって倒壊しました⁷⁷(図 3.22-2、3.22-3)。現在は震災で倒れた一ノ鳥居に変わって新たに鳥居が立てられています。



図 3.22-1 寒川神社(左:三ノ鳥居、右:本殿)



図 3.22-2 震災により倒壊した一ノ鳥居の一部 図 3.22-3 鳥居脇の説明板

また、寒川駅の南側にある一之宮八幡大神の本殿(図 3.22-4)では、「大正十二年、関東大震災により建物一切倒壊するが、同十五年、本殿他を再建す」との説明板(図 3.22-5)があり、今の本殿が震災後の再建であることが分かります。本殿の前を左に進むと2つの大きな石碑が建っており、向かって右が大震災記念碑です(図 3.22-6)。

⁷⁶ 諸井孝文・武村雅之,「関東地震(1923年9月1日)による被害要因別死者数の推定」,日本地震学会論文集,4(4),2004年

⁷⁷ 武村雅之・都築充雄・虎谷健司,「神奈川県における関東大震災の慰霊碑・記念碑・遺構(その1(県中部編))」,2014年



図 3.22-4 一之宮八幡大神の本殿

図 3.22-5 一之宮八幡大神境内の説明板



図 3.22-6 大震災記念碑

背面には、亡くなった方として、18名の氏名と年齢が書かれ、名前から男性7名、女性11名で年齢は1才から73才で高齢者と子供も被害を受けたことが分かります。

(23)五所八幡宮(中井町遠藤)

キーワード:地域全体の慰霊、土砂災害、河道閉塞



※ 地理院タイルに遺構の位置を追記して掲載
大磯丘陵の一部にかかる中井町は、震災当時の足柄上郡旧中井村が町制施行して町となりました。旧中井村では、建物全潰率が2割を超え、建物倒壊による死者が 24 名発生したことが分かっています⁷⁸。

中井町遠藤にある五所八幡宮は、震災当時「郷社八幡神社」という名称でしたが、1999 (平成 11)年に「五所八幡宮」と改称されました。JR 東海道線「二宮駅」から神奈川中央交通バスに乗りし「五所ノ宮停留所」で降りると東に赤い鳥居(一の鳥居、2007(平成 19)年再

⁷⁸ 諸井孝文・武村雅之、「関東地震(1923年9月1日)による被害要因別死者数の推定」,日本地震工学会論文集, 4 (4), 2004 年

建)と石造りの鳥居(二の鳥居、1991(平成3)年再建)が並んで建っている様子が見えます(図 3.23-1)。鳥居の左側に中井町消防団の建物があり、その前に復興記念碑が建っています(図 3.23-2)。



図 3.23-1 五所八幡宮の鳥居



図 3.23-2 復興記念碑(写真中央)

「復興」と書かれた石碑(図 3.23-3)には、旧中井村の被害として、家壊(全壊)213 棟、半壊 296 棟、死者 25 名と書かれており、旧中井村全体の被害の記録を残す石碑であることが分かります。また、「中村川障塞水逆行」との記載があり、土砂災害による河道閉塞が発生した様子もうかがえます。



図 3.23-3 復興記念碑に書かれた「復興」の文字

一方、石碑には、「拝殿倒鐘樓《楼》耳如本殿則無害」と書かれ、拝殿や鐘楼が倒れたものの本殿のみは被害が無かったようです。中井町に残る「中井村震災記念誌」⁷⁹には、鳥居が大破し、拝殿、幣殿などに大きな被害を出したことが書かれており、本殿の被害については書かれていませんが、武村ら⁸⁰は、中村尋常高等小学校の御真影が郷社八幡宮に奉安してあり無事であったという記載から本殿の無事を推察しています。本殿が無被害であったことは、石碑にも「安堵」や「神徳」の文言があるように、御神徳だと村人が感喜した様子が伝わります。

⁷⁹ 松本愛敬,「中井村震災記念誌」中井村役場,1925 年

⁸⁰ 武村雅之・都築充雄・虎谷健司,「神奈川県における関東大震災の慰霊碑・記念碑・遺構(その2 県西部編(熱海・伊東も含む))」,2015 年

(24)金子路傍(大井町金子)

キーワード:農地被害、耕地整理



※ 地理院タイルに遺構の位置を追記して掲載

酒匂川中流域の左岸側に位置する大井町を構成する当時の村々では、建物全潰率が足柄上郡旧上中村や旧金田村では 25%を超え、旧山田村では 50%近く、旧曾我村全体は 80%近くに達していたことが分かっています⁸¹。

JR 御殿場線「相模金子駅」から南西に約 500m、「新宿停留所」(富士急湘南バス)の南に位置する新宿山王社から 100m ほど南へ歩くと、道路右側の畑の中に大きな石碑が建っています(図 3.24-1)。

⁸¹ 諸井孝文・武村雅之,「関東地震(1923 年 9 月 1 日)による被害要因別死者数の推定」,日本地震工学会論文集, 4 (4), 2004 年



図 3.24-1 金子の路傍に立つ耕地整理の「記念碑」

これは「元農林政務次官正五位勲五等砂田重政題額」と書かれ、耕地整理を記念した石碑です。石碑には、旧金田村では元々「渴水の憂あり」、つまり水の確保に苦勞していたこと、震災により「地盤に凸凹を生し田面は亀裂し水路亦湮滅《隠滅（跡形もなく消えること）》し被害甚大なりし」との被害の様子が書かれています。

記念碑の背面には功勞者の氏名として、当時の県の農務課長だった草柳正治や農林技師の名前が書かれており、彼らが耕地整理組合による震災復興を奨励し、耕地整理の設計や工事監督として活躍した様子がうかがえます。

記念碑には、震災後耕地整理組合の設立認可を受けて、導水路の改修や区画の整備、水路や道路・橋梁の整備により、農地の復旧を行ったことで、7割5分だった二毛田が全て二毛田になり、収穫の増加を実現できたことを記念してこの石碑を建てたことが書かれています。

この記念碑は1936(昭和11)年に建てられたもので、震災から10年以上経過しています。経済不況により震災復旧は遅々として進まず⁸²、耕地整理に長い年月がかかり、苦勞の末、農業の再建を成し遂げた地域住民の思いを感じることができます。

⁸² 大井町,「大井町史通史編」,2001年

(25)曹洞宗延命寺(松田町松田惣領)

キーワード:断水、水の確保



※ 地理院タイルに遺構の位置を追記して掲載

現在の松田町にあたる地域は、震災発生当時、足柄上郡の旧松田町と旧寄村にまたがっていました。震災で旧松田町は、建物全潰率約40%、死者数10名の被害を受けました⁸³。

JR御殿場線「松田駅」から北東へ500mほど歩くと、延命寺へと登る坂道が見えてきます。坂道を進み、延命寺境内の山門をくぐると、左手に広場と観音堂があります(図3.25-1。2023(令和5)年6月末時点で、観音堂正面にある観音堂門付近は工事中。)。

⁸³ 諸井孝文・武村雅之、「関東地震(1923年9月1日)による被害要因別死者数の推定」,日本地震学会論文集, 4(4), 2004年



図3.25-1 延命寺の山門と観音堂

観音堂の手前には、いくつかの石碑が立ち並んでおり、その中の一つに「水道記念碑」があります(図3.25-2、3.25-3)。



図3.25-2 延命寺の水道記念碑



図3.25-3 「水道記念碑」の記載

武村ほか(2015)⁸⁴によると、水道記念碑には、旧松田町において震災後住民が飲料水の枯渇に苦しんだこと、それを打開するために、当時の町長鍵和田修平が町営水道を計画し、震災翌年の1924(大正13)年10月に完成したこと、また、その後の小田急線の開業などによる人口増加にともなって水道が拡張されていった過程が書かれています。

⁸⁴ 武村雅之・都築充雄・虎谷健司,「神奈川県における関東大震災の慰霊碑・記念碑・遺構(その2 県西部編(熱海・伊東も含む))」,2015年

「足柄上郡誌」⁸⁵には、観音堂が1703(元禄16)年の元禄地震により倒壊したこと、洪水の恐れもあったため、1706(宝永3)年に現在の延命寺境内に移したことに加え、関東大震災によっても観音堂が倒壊したことが記されています。また、延命寺住職の安藤浄眼は檀徒に図り、1927(昭和2)年に現在の位置に観音堂を移して再建したとも記されています。観音堂の前には堂内にある三仏像の説明板があります(図3.25-4)。

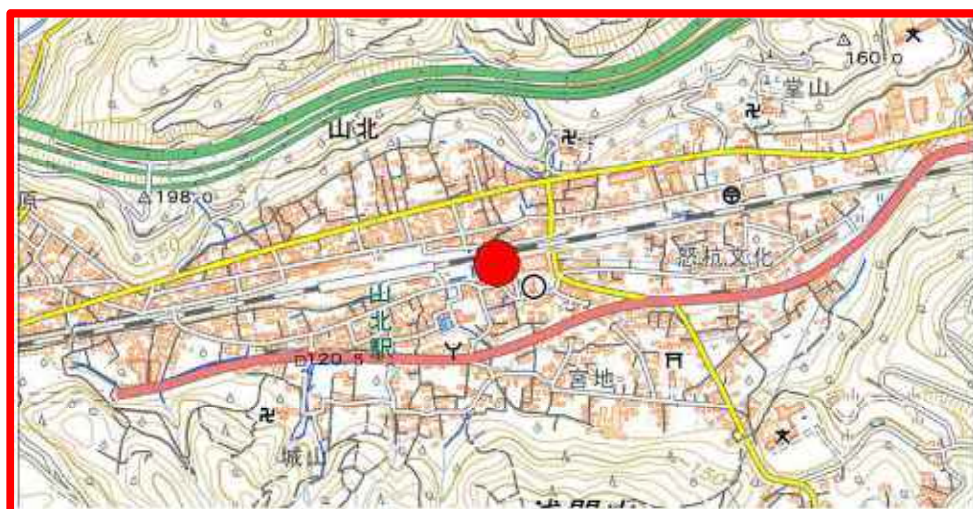
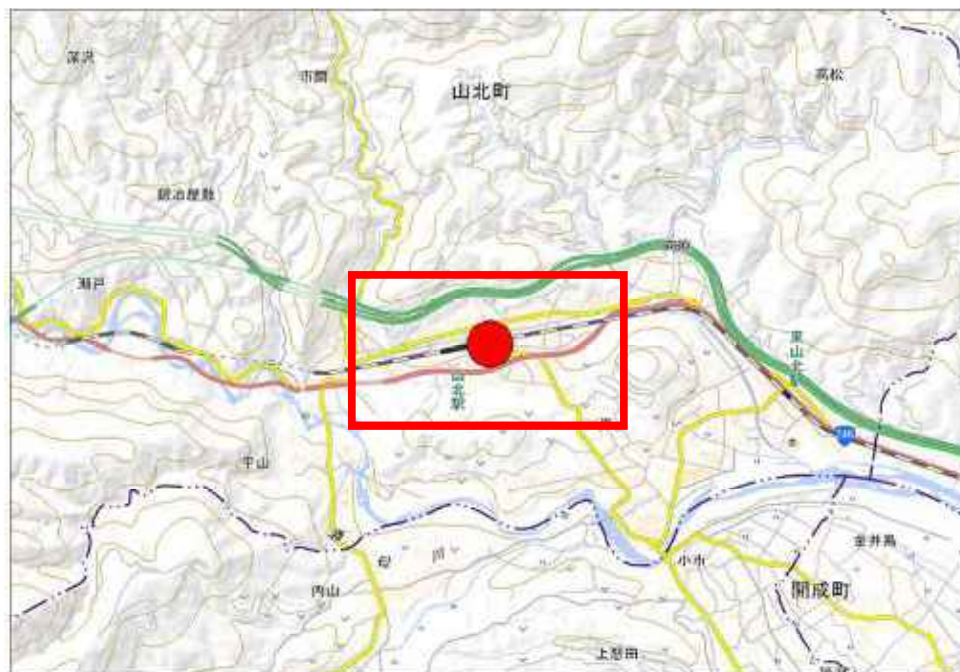


図 3.25-4 延命寺観音堂前の三仏像の説明板

⁸⁵ 足柄上郡教育会,「足柄上郡誌」,1924 年

(26)山北町役場(水害復旧記念碑)(山北町山北)

キーワード:土砂災害、複合災害



※ 地理院タイルに遺構の位置を追記して掲載

山北町役場がある山北地区は、震災発生当時は足柄上郡の旧川村に位置し、震災では旧川村は、建物全潰率約10%、死者数20名の被害となりました⁸⁶。

山北町役場裏の駐車場(図3.26-1)にある水害復旧記念碑(図3.26-2)には、震災以降、降雨があるたびに丹沢山地から土砂の流出が多くなったことが書かれており、震災から14年後の1937(昭和12)年の豪雨と重なって、大きな被害を出したことが書かれています。

⁸⁶ 諸井孝文・武村雅之,「関東地震(1923年9月1日)による被害要因別死者数の推定」,日本地震工学会論文集, 4(4), 2004年

さらに、水害復旧に着手した矢先、翌1938(昭和13)年にも再び豪雨があり、それまでの復旧が徒労に帰したとも書かれています⁸⁷。



図 3.26-1 山北町役場(役場裏手駐車場)



図3.26-2 山北町役場(役場裏手駐車場の隅)にある水害復旧記念碑

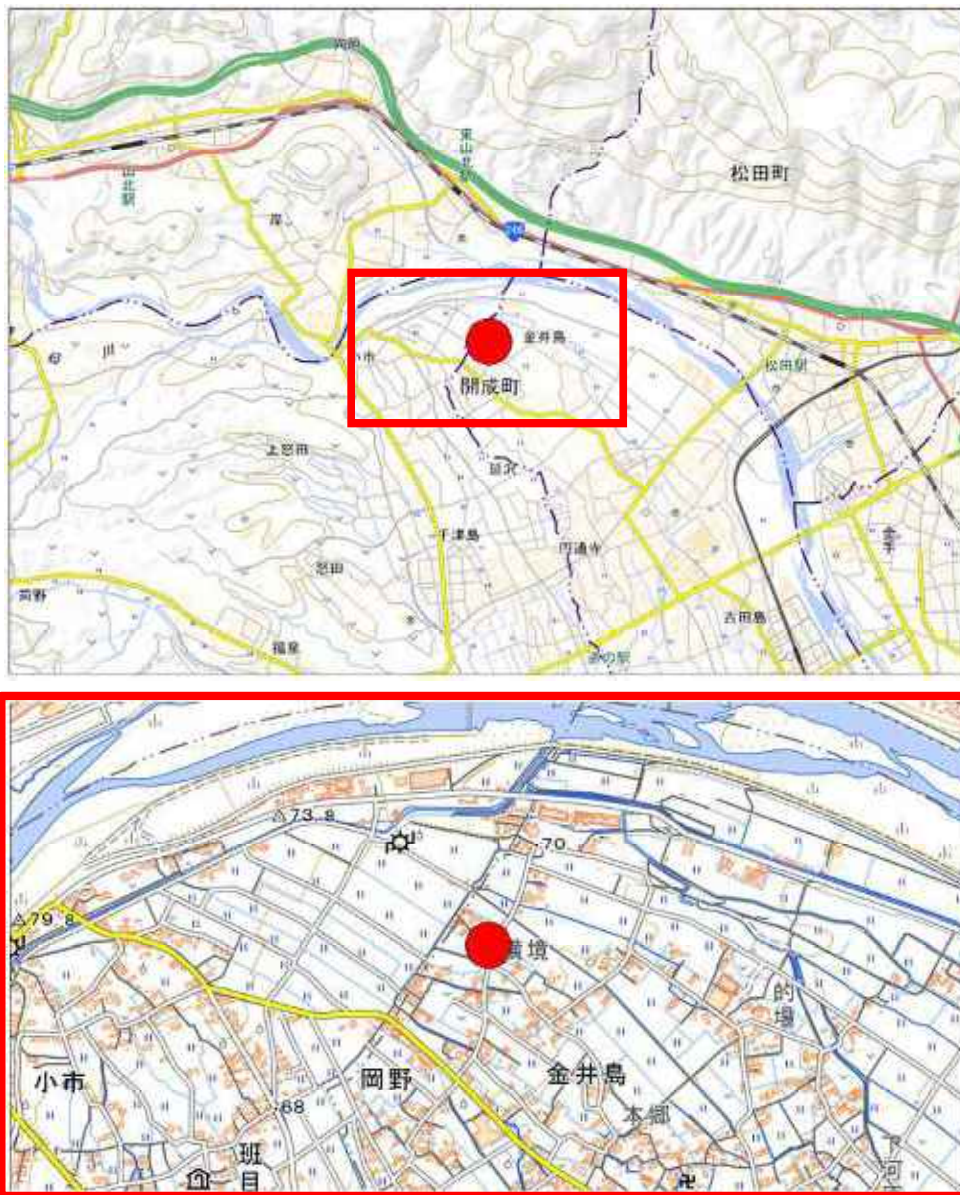
神奈川県県西土木事務所⁸⁸によれば、1937(昭和12)年7月14日から17日にかけての梅雨前線による集中豪雨で、県西部の三保、山北、松田、南足柄の山林耕地は水害により壊滅的な被害を受け、尺里川と滝沢川が埋没するなど数多くの土砂災害が発生し、死者不明者は17名、家屋の全半壊は320戸に及びました。このため、町は将来の災禍に備えるために皆瀬川、尺里川、滝沢川の3川に対し河川法準用の実現を目指し、1938(昭和13)年に3川が県に移管され、1942(昭和17)年まで防災工事が実施されています。

⁸⁷ 武村雅之・都築充雄・虎谷健司,「神奈川県における関東大震災の慰霊碑・記念碑・遺構(その2 県西部編(熱海・伊東も含む))」,2015年

⁸⁸ 神奈川県県西土木事務所 工務部 河川砂防第二課「昭和12年集中豪雨災害について」(2023.8.17閲覧)
<https://www.pref.kanagawa.jp/docs/vd8/kawa2/6301.html>

(27)金井島路傍(開成町金井島)

キーワード:断水、水の確保



※ 地理院タイルに遺構の位置を追記して掲載

酒匂川の右岸側に位置する現在の開成町は、足柄上郡の旧酒田村、旧吉田島村から成りますが、全潰率は5%以下、死者数も10名以下と、震災の被害はそれほど多くはなく、酒匂川流域左岸の松田町や大井町の被害の大きさとは対照的な状況でした⁸⁹。

JR 御殿場線「東山北駅」から南へ酒匂川を渡る橋を回り込んで約3.5km、酒匂川右岸の高台病院の南に位置する金井島の集落内に石碑があります(図3.27-1)。

⁸⁹ 諸井孝文・武村雅之、「関東地震(1923年9月1日)による被害要因別死者数の推定」,日本地震学会論文集, 4(4), 2004年



図 3.27-1 金井島にある横境上水道記念碑

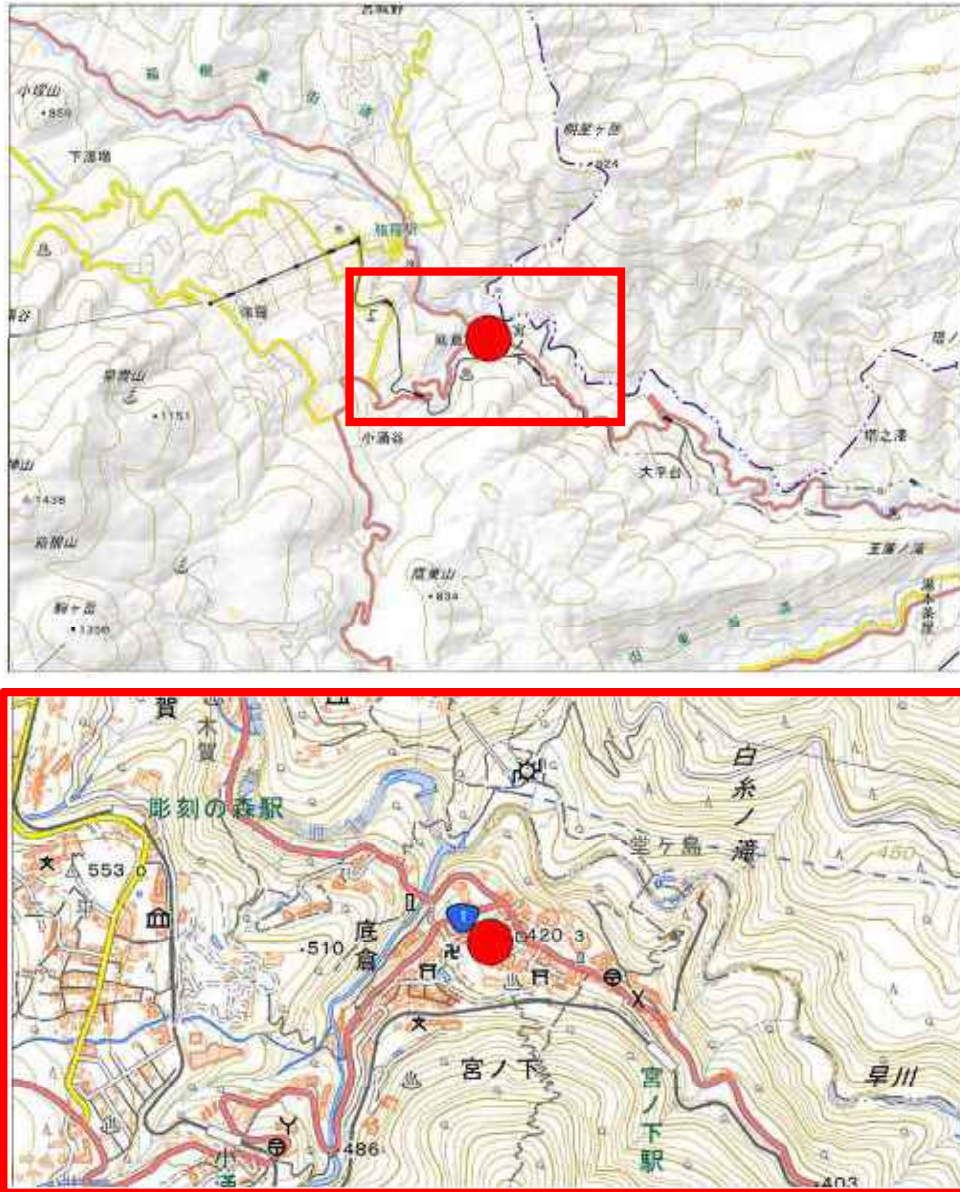
この石碑は「横境上水道記念碑」と書かれ、明治に掘られた共同井戸が唯一の水源であったところ、震災の際に「地下水の沈下を来し井水枯渇せり依って部落民相計りこれが掘下げ工事を行い清水を豊富に湧出するに至る」とあるように、地下水の沈下による井戸水の枯渇を、集落の住民による井戸の掘下げ工事で克服した様子が記されています。

旧酒田村では 150 本の井戸のうち 97 本が使えなくなった⁹⁰ということで、用水路の破壊や井戸の埋没・地下水低下などにより、水の確保に困難があった様子がうかがえます。

⁹⁰ 開成町、「開成町史通史編」,1999 年

(28)富士屋ホテル(箱根町宮ノ下)

キーワード:断水、水の確保



※ 地理院タイルに遺構の位置を追記して掲載

現在の箱根町を構成する足柄下郡の旧湯本村、旧温泉村などでは、旧箱根町を除き、建物全潰率は1～2割程度でしたが、旧箱根町は約 4 割と高い全潰率が記録されています⁹¹。一方で死者数を見ると、底倉や宮ノ下、大平台などを含む旧温泉村が 60 名を超え、土砂災害による死者が多く発生したとされています⁹²。

多くの温泉宿も被害を受けた中で、日本のリゾートホテルの草分け的存在の一つである「富士屋ホテル」も被害を受けました。箱根登山線「宮ノ下駅」から北西に約 400m にあるこ

⁹¹ 諸井孝文・武村雅之,「関東地震(1923年9月1日)による木造住家被害データの整理と震度分布の推定」,日本地震工学会論文集,2(3),2002年

⁹² 諸井孝文・武村雅之,「関東地震(1923年9月1日)による被害要因別死者数の推定」,日本地震工学会論文集,4(4),2004年

のホテルには「ホテル・ミュージアム」があり、ホテルの歴史が紹介されています。

富士屋ホテルは1878(明治11)年創業で、1891(明治24)年に本館、1906(明治39)年に西洋館1、2号館が竣工されました。また、1923(大正12)年には芦ノ湖畔で箱根ホテルの営業を始めましたが、こちらは震災で全壊しました。富士屋ホテル自体も被害を受けて、翌年夏頃まで営業を休止しています^{93,94}。

本館と西洋館(図 3.28-1)は、敷地内の多くの建物が倒壊する中、倒壊を免れて、現存する貴重な建物で、国の登録有形文化財となっています。



図 3.28-1 富士屋ホテル本館(手前)と西洋館(奥)

また、本館の後ろにある庭園の一角に木造鳥居と共に泉があり(図 3.28-2)、その説明板には、断水が発生したものの、当時あった井戸がホテルのお客様の食事や洗面に役立ち、水道工事が復旧するまで利用されたことが記されています(図 3.28-3)。

現在もこの古井戸跡は、「ホテルの守り神」として大切に祀られています。



図 3.28-2 古井戸跡の泉



図 3.28-3 古井戸跡の説明板

⁹³ 富士屋ホテル 歴史 (2023.8.17 閲覧) <https://www.fujiyahotel.jp/brand/history/>

⁹⁴ 富士屋ホテル, 「富士屋ホテル八十年史」, 1958 年

(29) 貴船神社とまなづる小学校(真鶴町真鶴)

キーワード: 津波、火災



※ 地理院タイルに遺構の位置を追記して掲載

現在の真鶴町を構成する震災当時の足柄下郡旧岩村、旧真鶴村は、建物全潰率2割を超える被害が発生しました⁹⁵。被害の特徴として、旧岩村では土砂災害による死者が 61 名、旧真鶴村では、火災による死者が 85 名発生しています⁹⁶。

JR 東海道線「真鶴駅」を降り、箱根登山バス「宮前停留所」で下車するとすぐそば(バス停がある県道 739 号沿い)に、駐車場や境内に繋がる階段があります(図 3.29-1)。

⁹⁵ 諸井孝文・武村雅之、「関東地震（1923 年 9 月 1 日）による木造住家被害データの整理と震度分布の推定」, 日本地震工学会論文集, 2 (3), 2002 年

⁹⁶ 諸井孝文・武村雅之、「関東地震（1923 年 9 月 1 日）による被害要因別死者数の推定」, 日本地震工学会論文集, 4 (4), 2004 年



図 3.29-1 貴船神社の入口(駐車場・境内への階段)

駐車場の脇には、日本三大船祭りとして知られ、県指定の無形文化財や国指定の重要無形民俗文化財にも指定されている「貴船まつり」で用いる小早船や櫓伝馬(かいでんま)をしまうための倉庫があります(図 3.29-2)。

境内へ上がる階段の左手前には、「貴船神社」と書かれた石碑があり、碑文には、神社の由来や貴船まつりの説明が書かれています(図 3.29-3)。



図 3.29-2 貴船まつりで用いる船の倉庫 図 3.29-3 「貴船神社」と書かれた石碑
(駐車場脇)

境内は5段に分かれ、それぞれの段を繋ぐように階段が真っ直ぐに向かって伸びています。

鳥居がある1段目内、参道の左側の石碑群の中に「震災復舊《旧》記念」の碑(図 3.29-4)が、また、参道の右側には「小早新造」の碑(図 3.29-5)があります。



図 3.29-4 「震災復舊記念」の碑

図 3.29-5 「小早新造」の碑

「震災復舊《旧》記念」と書かれた記念碑(図 3.29-4)には、鳥居(図 3.29-1 の右側の写真)の建設に関わった寄附者や請負人、氏子などの方々の氏名が書かれています。鳥居にも、一方の柱に「寄附者 青木宗吉」、もう一方の柱に「大正十五年五月再建」と刻まれています。

石碑には「記念」ではなく「紀念」と書かれています。現在の宮司によると、これは当時の宮司が、氏子の方々に早く立ち直ってほしいという思いを込めて、復興の『記』録だけにとどまらない石碑として残したという理由によるものです。

「小早新造」と書かれた記念碑(図 3.29-5)には、「貴船まつり」で用いる小早船の再建について記されています。東西で二隻あった小早船のうち、震災で焼失した東の東明丸を青年団が中心となって再建したというもので、現在の宮司によると、地域の皆が元気になれるように、震災からの復興の象徴として優先的に再建されました。

旧真鶴村では地震後に大火災が発生しました。焼失率は約 60%に達し、焼死者は、死者数の 83%を占めています。東明丸はその際に焼失したものと思われます。

旧真鶴村は漁港に面した漁師町で、地震の前年に開通した国鉄熱海線の真鶴駅から港へは満足な道路がなく、入り組んだ細い急な坂道の斜面沿いに家屋が密集して建っていましたが、震災により真鶴港から真鶴小学校(現・まなづる小学校)に至る広範囲が焼失したことが分かっています(図 3.29-6)。

境内の2段目には神社の由緒が書かれた説明板(図 3.29-7)があり、「大正十二年の関東大震災から復興するに当たり、境内を拡張して昭和十年現在地に社殿を移転」と書かれています。



図 3.29-6 旧真鶴村の延焼地域
(今村(1925)を元に武村(2010)が
作成した図に武村ほか(2015)が加筆)



図 3.29-7 境内の説明板

現在の宮司によると、神社の社殿は、震災当時は現在の4段目にあり、揺れによる被害はありませんでした。

また、社殿は津波にも襲われたものの、流されることはありませんでした。しかし、将来の

津波のことなども考えて、より高い場所(現在の5段目)に移されました(図 3.29-8)。4段目から5段目(境内の最上段)に至る階段は 85 段もあり、震災前の社殿からかなり高い場所に移転されたことが分かります。



図 3.29-8 4段目から5段目への階段と、5段目にある現在の本殿

なお、真鶴港から真鶴駅側へ斜面を登っていく地域(現在の真鶴港郵便局付近)に、「横捲(よこまくり)」という字名があります。現在の宮司によると、関東地震後の津波が沖から陸側に侵入して横捲周辺地域まで駆け登り、引き波の際、周辺の建物をさらって(まくって)いったことが字名の由来となっています。

図 3.29-6 の延焼地域に含まれるまなづる小学校(図中では「真鶴小学校」と記載。)にも震災記念碑が建っています(図 3.29-9)。震災記念碑には、「本町ノ家屋倒壊算ナク火災二次ニ海嘯《津波のことを指す》ヲ以テシ死者百傷者數《数》百宛然焦熱地獄ヲ現ゼリ本校舎亦倒壊火ヲ失ス時正午ニ近ク」と書かれ、津波や火災の被害が大きかったことが分かります⁹⁷。また小学校についても、学校で4名が亡くなったこと、児童十数名が自宅で亡くなったこと、岡田校長が身をていして御真影(天皇陛下の御写真)を守ったことなどが記載されています。



図 3.29-9 まなづる小学校の震災記念碑(武村教授提供)

⁹⁷ 武村雅之・都築充雄・虎谷健司,「神奈川県における関東大震災の慰霊碑・記念碑・遺構(その2 県西部編(熱海・伊東も含む))」,2015年

(30)日蓮宗妙誠寺(愛川町半原)

キーワード:土砂災害



※ 地理院タイルに遺構の位置を追記して掲載

現在の愛川町を構成する愛甲郡の旧愛川村、旧高峰村、旧中津村では、被害世帯数こそ少ないものの、死者は17名を数え^{98,99}、その大部分は旧愛川村馬渡で発生した土砂災害による死者(15名)であることが分かっています¹⁰⁰。

この土砂災害の犠牲者の慰霊碑がある妙誠寺は、小田急小田原線「本厚木駅」から神奈川中央交通バスで「馬渡停留所」にて下車し、そこから、馬渡大坂を登ったところにあります。

⁹⁸ 諸井孝文・武村雅之、「関東地震(1923年9月1日)による木造住家被害データの整理と震度分布の推定」,日本地震工学会論文集, 2(3), 2002年

⁹⁹ 諸井孝文・武村雅之、「関東地震(1923年9月1日)による被害要因別死者数の推定」,日本地震工学会論文集, 4(4), 2004年

¹⁰⁰ 西坂勝人,「神奈川県下の大震火災と警察」警有社, 1926年

本堂へ通じる階段(図 3.30-1)の左側に慰霊碑が 5 基建っており(図 3.30-2)、中央の大きい慰霊塔と、その右の母子地蔵ならびに三体地蔵(図 3.30-3)が震災に関連する可能性のある慰霊碑です¹⁰¹。

震災時、崖崩れは妙誠寺の下方を流れる中津川沿いの集落を襲いました¹⁰¹。「大震災歿死《おうし》者慰霊塔」には土砂災害の犠牲者の名前が書かれており、母子地蔵や三体地蔵にも震災により亡くなった可能性を示す年次が書かれています。

慰霊塔に記載された犠牲者のうち冒頭の 6 名は中村姓ですが、母子地蔵の施主である中村博直氏はこの家族の中で唯一生き残った人ようです¹⁰¹。横浜美術館のビデオライブラリーによれば、中村博直氏は 1916(大正5)年生まれで、文部大臣賞や日本芸術院賞などの受賞歴のある日展理事の彫刻家で、戦後主に女性像に取り組んだとのことですが、震災当時は 7、8 歳の少年であったようです¹⁰¹。母子地蔵を寺に納めたのは成人してからであろうと思われますが、家族でただ1人生き残り、その後は計り知れない苦労をしたと思われる中、震災から時間が経過しても、慰霊を行いたいという強い思いを感じ取ることができます。



図 3.30-1 妙誠寺本堂へ通じる階段 図 3.30-2 大震災歿死(おうし)者慰霊塔



図 3.30-3 母子地蔵ならびに三体地蔵

¹⁰¹ 武村雅之・都築充雄・虎谷健司,「神奈川県における関東大震災の慰霊碑・記念碑・遺構(その1 県中部編)」,2014 年